福岡市埋蔵文化財調査報告書第889集

那　珂　43

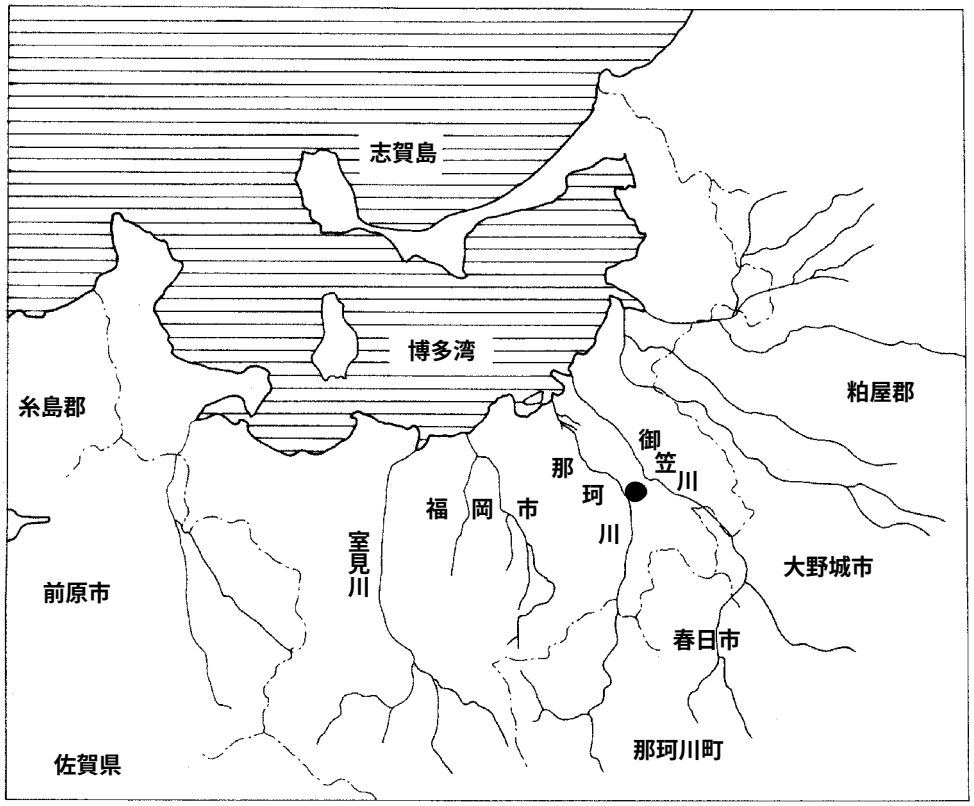
－那珂遺跡群第106次調査報告－

２００６
福岡市教育委員会

那　珂　43

－ 那珂遺跡群第 106次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 889集



調査番号　0476
調査略号　NAK－ 106

２００６

福岡市教育委員会

序

福岡市の博多区は、弥生時代の奴国の中心地域として、学史的に有名な国史跡板付遺跡を初めとして、数多くの重要な埋蔵文化財が包蔵されている地域です。また那珂遺跡群が所在するこの地域は、都心に近い住宅・商業地域として、近年都市化が著しく進んでいる地域で、それに伴う発掘調査も行われています。

今回報告する那珂遺跡群は、板付遺跡と同時期の弥生時代最古期の環濠集落や、九州最古期前方後円墳の那珂八幡古墳などが所在する、市内でも最も重要な遺跡の一つです。

今回の報告は平成16年に実施した第106次調査地点の発掘調査のもので、民間の共同住宅建設に伴って実施したものです。調査では弥生時代から古墳時代初め頃と、中世後期の集落跡を調査しました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、学術研究、文化財保護の普及啓発活動においても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、有限会社オクトをはじめとして、関係各位のご協力に対して、厚く感謝の意を表します。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　植木　とみ子

例　　言

⑴　本書は、福岡市教育委員会が平成16年（2004）に福岡市博多区那珂１丁目837―１で実施した那珂遺跡群第106次調査の発掘調査報告書である。

⑵　発掘調査は上記の主体により行われ、調査の担当は山崎龍雄が行った。

⑶　遺構実測は山崎龍雄、藤野雅基が主体となって行い、また遺物の実測は山崎、上方高弘、境聡子、河野摩耶が行い、SE06井戸出土土器は久住猛雄が行った。

⑷　本書に使用した図面の浄書は山崎、境、大久保玲子、成清直子が行った。

⑸　遺構の撮影は山崎が行い、出土遺物の撮影は上方が行った。

⑹　本書に使用した方位は磁北であり、真北との偏差は６°18′西偏である。

⑺　調査に係る記録類・出土遺物は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。

⑻　本書の執筆・編集は山崎が行ったが、SE06井戸出土遺物については久住に原稿をお願いした。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに　頁
1　調査に至る経過…… 1
2　調査の組織…… 1
第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境
1　遺跡の立地と歴史的環境…… 3
第Ⅲ章　調査の記録
1　調査の概要…… 4
2　遺構と遺物…… 4
3　小　結…… 27

挿　図　目　次

Fig.1　周辺遺跡分布図（1/25,000）…… 2
Fig.2　調査区位置図（1/6,000）…… 4
Fig.3　調査区全体図（1/200）…… 5
Fig.4　SE02（1/40）…… 7
Fig.5　SE02出土土器①（1/4・1/5）…… 9
Fig.6　SE02出土土器②（1/5）…… 10
Fig.7　SE02出土土器③（1/4・1/5）…… 11
Fig.8　SE02出土土器④（1/4・1/5）…… 12
Fig.9　SE02出土土器⑤（1/4・1/8）…… 13
Fig.10　SE02出土土器⑥（1/4）…… 14
Fig.11　SE04・06・17（1/40）…… 16
Fig.12　SE06出土土器（1/4）…… 17
Fig.13　SE17出土土器（1/4）…… 19
Fig.14　SE02・17出土石器・木器（1/3・1/6）…… 20
Fig.15　SD12・SX21土層（1/80・1/60）…… 21
Fig.16　SD12出土土器（1/3）…… 22
Fig.17　SK01・03・18・19、SP01（1/20・1/40）…… 24
Fig.18　SK05・10・16・18、SP01・11出土土器、SD12、SK20出土石製品（1/4・1/3）…… 25
Fig.19　第106次調査地点周辺遺構状況（1/1,000）…… 28

図　版　目　次

PL.1　⑴ 調査区から那珂八幡古墳を臨む（南西から）⑵ 1区全景（南西から）
PL.2　⑴ 2区全景（西から）⑵ SD12（南西から）
PL.3　⑴ SE02（西から）⑵ SE02断割り（南から）
PL.4　⑴ SE02遺物出土状況（西から）⑵ 同下層遺物出土状況
　　⑶ SE03（南東から）
PL.5　⑴ SE06（北から）⑵ 同遺物出土状況（南から）
　　⑶ SE17（北から）⑷ 同遺物出土状況
PL.6　⑴ SD12（西から）⑵ SD12北壁土層（南から）
　　⑶ SK19・SX21（北西から）
PL.7　⑴ SK01（南から）⑵ SK03（北から）
　　⑶ SK05（北東から）⑷ SK09・10・14（北東から）
　　⑸ SK18（北から）⑹ SK19（北から）
　　⑺ SK20（南から）⑻ SP01（南から）
PL.8　⑴ SE02出土土器 ①
PL.9　⑴ SE02出土土器 ②　⑵ SE06出土土器 ①
PL.10　⑴ SE06出土土器 ②　⑵ SE17出土土器

第Ⅰ章　はじめに

１.調査に至る経過

平成16（2004）年８月６日に有限会社オクトより、福岡市博多区那珂１丁目837番１における共同住宅建設の為の埋蔵文化財事前審査願（受付番号16―２－478）が福岡市教育委員会に提出された。申請地は那珂遺跡群の中央部に位置する。申請地は平成５年（1993）年に現在の店舗建設に先立って、埋蔵文化財の事前審査願（５－２－350）が提出され、試掘調査を行い、遺構を検出した。それを受けて協議を行い、設計変更で建築許可していたものである。したがって、開発に先立っては埋蔵文化財の記録保存が必要であるとして、申請者と協議を行い、発掘調査費用を申請者側に負担していただくということで、建物建設予定地部分を対象に調査を実施することとなった。

調査は建物解体後の平成17年１月11日から開始し、２月16日迄行った。調査実施面積は申請面積508.66㎡中の333.0㎡である。また報告書作成作業は平成17年度に実施した。

調査にあたっては、地権者の有限会社オクトをはじめとして、工事関係の方々に協力を受けた、記して感謝の意を表します。

２.調査の組織

調査の体制は以下のとおりである。

調査委託者	有限会社　オクト　　代表取締役	吉武　政福
調査主体	福岡市教育委員会教育委員会	
調査総括	文化財部埋蔵文化財課長	山口　譲治
事務担当	埋蔵文化財課調査第２係長	池崎　譲二
	文化財整備課管理係	御手洗　清(旧)、鈴木　由貴(現)
調査担当	埋蔵文化財課主任文化財主事	山崎　龍雄（現同課調査第一係長）

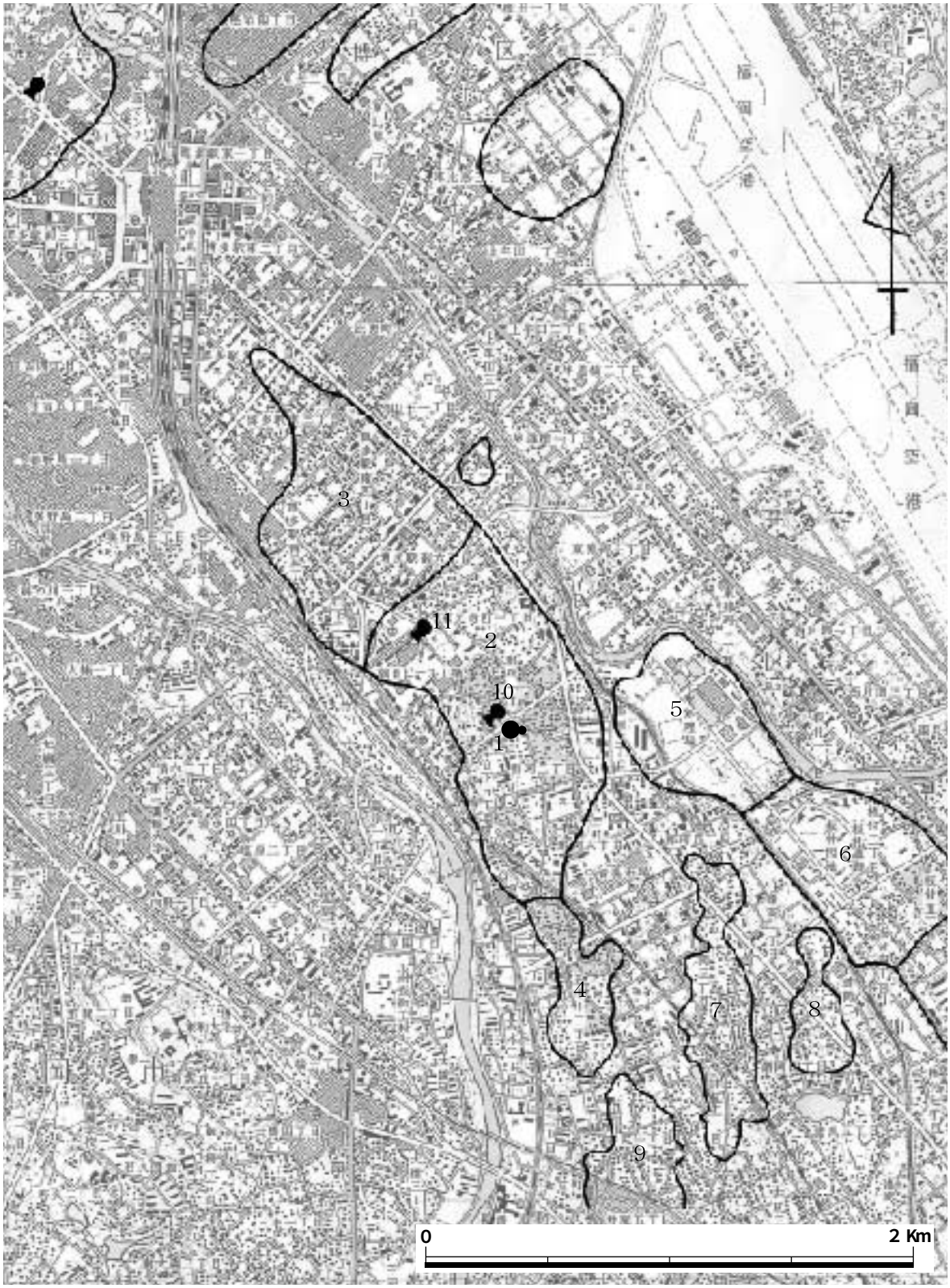
調査作業　井上一雄、井上利弘、井上英子、岩崎良隆、大橋由美子、岡部安正、北原由紀子、佐藤アイ子、末次　亮、堤　正子、藤野雅基、波賀久雄、別府俊美、山下嘉人

整理作業　上方高弘、河野摩耶、境　聡子、大久保玲子、増永好美、村上信子

整理にあたっては、一部、埋蔵文化財課の久住猛雄の協力を受けた。

第106次調査の概要

遺跡略号	調査番号	調査地番	申請面積	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当
NAK-106	0476	福岡市博多区那珂1丁目837―1	508.66㎡	333.0㎡	共同住宅	2005.1.11～2.16	山崎龍雄



1．第 106 次調査区　2．那珂遺跡群　3．比恵遺跡群　4．五十川遺跡
5．那珂君休遺跡　6．板付遺跡　7．諸岡 A 遺跡　8．諸岡 B 遺跡
9．井尻 B 遺跡　10．那珂八幡古墳　11．剣塚古墳

Fig.1　周辺遺跡分布図（1/25,000）

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

１.遺跡の立地と歴史的環境（Fig.1）

福岡平野は、西は背振山塊から派生する長垂丘陵、東は犬鳴・三郡山地に画された地域で、南北に貫流して博多湾に注ぐ室見川・樋井川、那珂川・御笠川、宇美川・須恵川・多々良川などの中小河川の沖積作用によって形成された沖積平野と、油山北部台地・鴻巣丘陵や、諸岡台地、糟屋台地などの丘陵・台地部とによって形成された平野である。この平野はまた地形的に西から早良平野、福岡平野、糟屋平野に細分され、ここで言う狭義の福岡平野は那珂川と御笠川、月隈丘陵に囲まれた部分を指す。

那珂遺跡群はこの福岡平野の北側、那珂川と御笠川に挟まれた最大標高10m程を測る洪積台地上に立地する。この台地は内陸部の春日市域まで断続的続き、阿蘇起源とされるＡＳＯ－Ⅳ火砕流によって形成されたものである。

那珂遺跡群は平成17年10月現在、第109次調査迄行われている。遺跡で一番古い時期は遺跡南部の第23・41次調査区など数か所で旧石器時代の遺物が出土しているが、遺跡全体としては縄文時代終末までは発見された遺構・遺物は少ない。周辺では、諸岡遺跡や板付遺跡などで旧石器時代の包含層・遺物が調査されている。この遺跡が展開するのは弥生時代早期（縄文時代晩期終末）頃からで、遺跡群の南端の第37次調査区で、板付遺跡の環濠と同時期の環濠集落が出現する。その後、弥生時代後期にかけて集落は全面的に拡大し、北側に隣接する比恵遺跡と一体化した集落となる。遺跡規模は隣接する比恵遺跡と合わせると1.4㎢を測る。那珂遺跡群では環濠集落は台地中央部の第67次調査区でも検出されている。終末期から古墳時代初期にかけては比恵遺跡にかけて全長1.5㎞に及ぶ道路状遺構が周囲一帯の調査から推定されている。遺跡内では甕棺墓地群は現在７か所で確認されているが、いずれも規模は小さく、金隈遺跡のように数百基が密集する大規模な墳墓域は確認されていない。

古墳時代も引き続き集落は全域に展開する。ただ台地中央高所部には福岡平野最古期の前方後円墳である那珂八幡古墳が造営される。古墳は全長約85mを測り、調査された第二主体部の木棺から三角縁神獣鏡が１面出土した。またその周辺には同時期の方形周溝墓が確認されており、そのころ古墳周辺が墳墓域であったことが分かる。後期になると墳墓域は北側に移り、アサヒビール工場地内に東光寺剣塚古墳が作られる。北側の比恵遺跡群内では大型建物群や多重の柵に囲まれた高床倉庫群が存在し、その規模や区画から『日本書紀』宣化天皇元年五月一日条に見える那津官家の関連する遺構と思われる。また那珂遺跡群の南部を中心にして飛鳥～奈良時代の大型建物跡や区画溝が各所にあり大宰府の全身である筑紫大宰や那珂郡衙の可能性が指摘されている。瓦葺き建物があったようで、調査でも瓦が多く出土している。

中世以降は一般村落に変化していく。遺構は全域に確認できるが、量はそれほど多くない。ただ中世でも後半期になると、大溝(堀)を周囲に巡らした屋敷地が各所に認められ、防御的色彩が強くなる。筥崎宮座主城戸清種が記した『豊前覚書』(1615) によれば、「天正九年辛巳三月六日、那珂郡内之内、麥野村御捕誘被成候、其子細ハ、廣門衆那珂ノ郡へ節々乱妨ニデ申し候あいだ、そのおさへとして、人數ヲ可被籠当置タメ也、・・・」とあり、戦国時代、度々戦火に見舞われた博多周辺地域の村々における自衛の状況を示すものといえよう。

第Ⅲ章　調査の記録

１．調査の概要（Fig.2・3、PL.1・2）

本調査区は那珂遺跡群の中央部に位置し、標高は現況で約９ｍを測る。調査区の北側には那珂八幡古墳が所在する。また調査区北側では道路建設に伴って、第32・34次調査が行われ、弥生時代から戦国時代にかけての遺構・遺物、那珂八幡古墳の周溝なども検出されている。西側の第62次調査区では古墳時代前期前半の方形周溝墓が検出されている。

調査は店舗解体後のバックホーによる表土除去から開始した。コンクリート基礎の処理の関係から、原因者の協力を得て、一部場外に持ち出した。調査は廃土処理の関係から二分割して行った。遺構面は表土下20～30cmの鳥栖ローム土である。検出した主な遺構は弥生時代中期後半から弥生時代終末頃の井戸４基、古墳時代の土坑１基、中世後期の溝１条、土坑５基などである。

遺物は井戸を中心にパンコンテナで34箱出土した。弥生時代の土器が大半で、完形のものも多い。

２．遺構と遺物

①　井戸

SE02（Fig.4、PL.3・4）

調査区北壁際で検出した。一部調査区外である。上部形状は不整楕円形で、確認規模は長軸径1.6m、深さは約3.7mを測り、八女粘土迄掘り込んでいる。壁面は上面から－0.8～1.15mあたりから奥へ大きく抉れる。井戸の埋土は上面では暗褐色粘質土で、下層は黒色粘土と八女粘土ブロックの混合、井戸底近くは抉れた壁面から流れ込んだ八女粘土である。

出土遺物（Fig.5～10・14、PL.8・9）土器が集中して出土する部分は３か所あった。１か所目は上

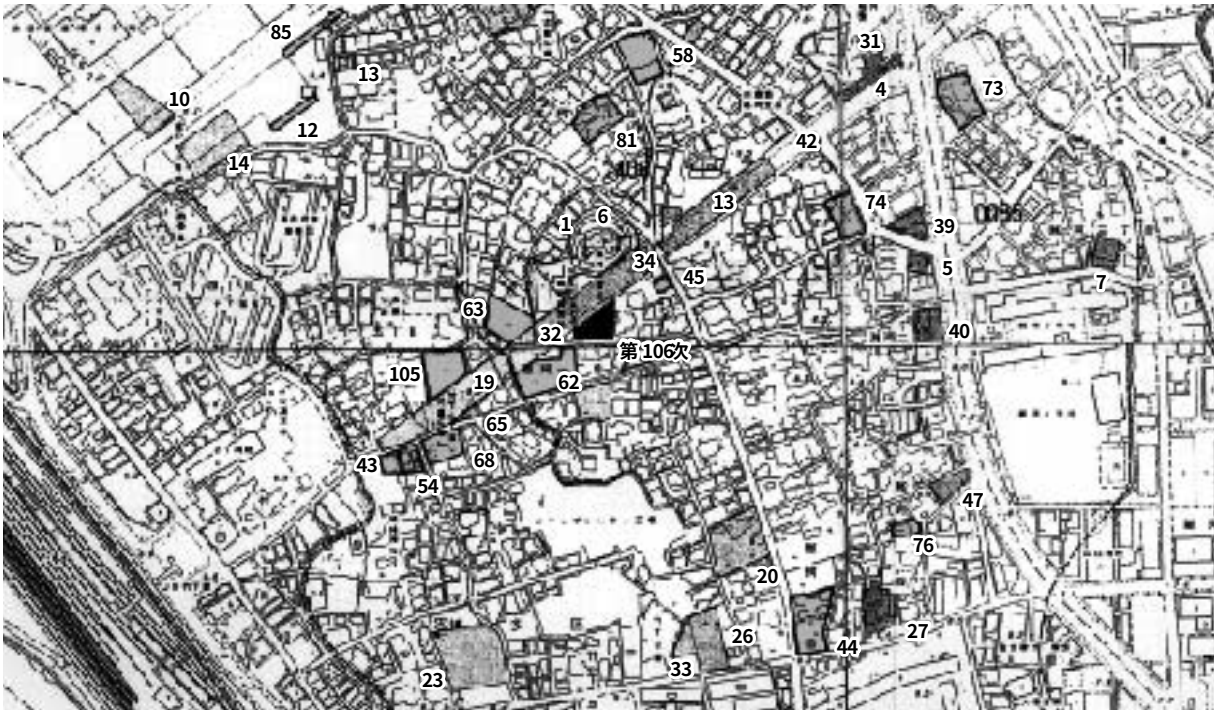


Fig2　調査区位置図（1/6,000）

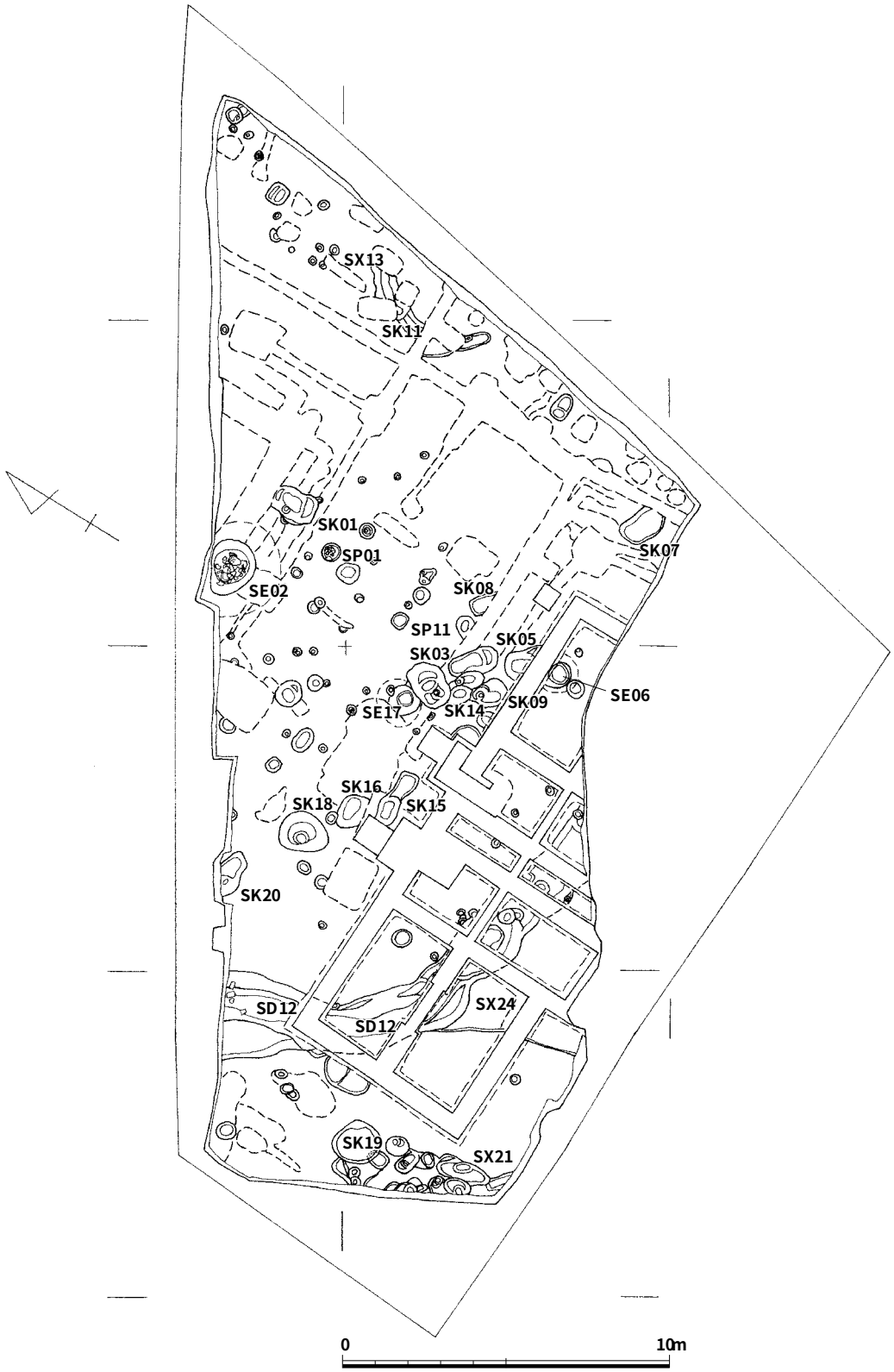


Fig. 3　調査区全体図（1/200）

面から50㎝下がったあたりから壁の抉れ部あたりまでで、多量に廃棄された土器群があった。２か所目は上面から－1.5m程下の抉れ部の下部、３か所目は井戸底で、完形の土器や木片などが出土している。土器はやや時期幅があり、弥生時代中期中頃から後半頃のものである。

１～22は上層土器群出土。１～５は壺。１は小型壺。一部欠損する。口縁部が直立し、やや逆Ｌ字形を呈す形態。口径10.7㎝、器高11.0㎝、底径6.7㎝を測る。調整は外面ハケメ、内面と底部はナデ。焼成は良好。外面色調浅黄橙色を呈す。２は口縁が逆Ｌ字形を呈し、胴部が下膨れの形態。1/3片で、復元口径は14.8㎝を測る。調整は胴部外面が粗いタテハケメ、口縁部から内面はナデで、指圧痕が残る。胎土に砂粒少量含む。外面色調は橙色。３は長頸の鋤先口縁である。頸部に４条の突帯が付く。口縁端部は打ち欠き。調整は内外面ヨコナデ又はナデ。口縁部上面には円形の貼付浮文が１個付く。外面から頸部内面までは丹塗りである。胎土は粗砂・金雲母を含む。４は大型の鋤先口縁壺。頸部と胴部にM字形突帯が付く。底部を欠く1/2片。復元口径34.4㎝、残存高44.7㎝を測る。器壁は薄く調整は内外面ナデ。胎土は１㎜内外の砂粒・雲母を多く含み、赤褐色粒子も含む。焼成は良好。外面色調は橙色からにぶい橙色を呈す。５は長胴で胴部最大径が中央にあり、口縁が外反し、水平に延びる形態。窄まった頸部に三角突帯が付く。1/3～1/4片で、復元口径17.9㎝、器高47.2㎝、最大胴径47.2㎝を測る。表面は全体に摩滅するが、調整はナデで、口縁部はヨコナデ、粘土帯の痕跡が残る。内底には指押え痕が残る。胎土は３㎜内砂粒を少量含む。焼成は不良。外面色調は口縁部橙色、胴部浅黄橙色を呈す。６～19は甕。6･7は胴部上半に方形の透かし窓を持つ形態。出土例は少ない。口縁部は「く」字状に屈折し立上る。６は一部欠損し、やや歪む。口径は19.5㎝・19.0㎝、器高26.2㎝・24.6㎝を測る。調整は胴部外面ハケメで、上半から内面はヨコナデからナデとなる。窓部は11.0×8.0㎝で、縁はナデる。７の外面には黒斑がある。外面色調はいずれもにぶい浅黄橙色。８～16は逆Ｌ字形を呈す口縁の形態。中型から大型の甕。８～10は緩やかに外反する口縁で、口径はそれぞれ復元30.4㎝・33.0㎝・32.8㎝を測る。調整は胴部外面ハケメ、口縁部はヨコナデ、内面はナデで、9･10の口縁部内面はヨコハケメで、９はナデ消す。８と10の表面はやや摩滅し、10は剥落がある。8･9の胎土は粗砂を多く混入する。焼成はいずれも良好。外面色調は８がにぶい褐色、9･10はにぶい赤褐色。11は口縁端部が丸く膨れる。復元口径は36.6㎝を測る。外面摩滅し、調整不明。口縁部ヨコナデ、内面はナデ。胎土は粗砂粒を多く含み、焼成は不良。外面色調は橙色。12･13は歪みにより復元できないが、同一個体と思われる。復元口径32.0㎝、器高40.0㎝弱を測る。表面は摩滅が進むが、調整は外面粗いハケメ、内面はナデで、胴部中央には粗いハケメが残る。最大３㎜程の粗砂粒を多く含み、外面色調はにぶい橙色。14は丸みを持つ下胴部片。底径9.5㎝、残存高22.0㎝を測る。表面は摩滅するが、調整は外底近くハケメ、内面はナデ。胎土は最大２㎜程の砂粒、赤色粒子・雲母粒を少量含む。焼成は良好、色調は橙色で黒斑がある。15は胴部中央にM字形突帯が１条巡る。調整は外面ヘラミガキ、内面はやや荒れるが、丁寧なナデ。胎土は精良、焼成は良好。色調は外面丹塗りであるが、所々剥げている。16･17は口縁部が内傾し、頸部に三角突帯が付く形態。復元口径45.4㎝、最大胴径46.6㎝を測る。調整は胴部外面ハケメ、口縁部ヨコナデで、内面工具痕が残る。胴部内面は丁寧なナデで、指押え痕が残る。胎土最大２㎜の砂粒を多く含み、焼成は良好。17は復元口径52.0㎝を測る。表面は摩滅がひどく、調整は不明。胎土は最大５㎜の粗砂粒を多く含み、黒色粒子も少量含む。色調はいずれもにぶい橙色を呈す。18･19は大型甕の胴底部。底径10.9㎝・10.0㎝、残存高39.3㎝・21.8㎝を測る。18の調整は外面粗いハケメ、内面はナデ。胎土は精良。焼成は良好。外面色調は橙色。19の表面は摩滅するが、胴外底近くハケメが残り、内面は指押え後ナデ。胎土は２～４㎜の粗砂を多く含み。焼成は不良。外面色調は橙色を呈す。20は鉢で、復元口径19.3㎝、

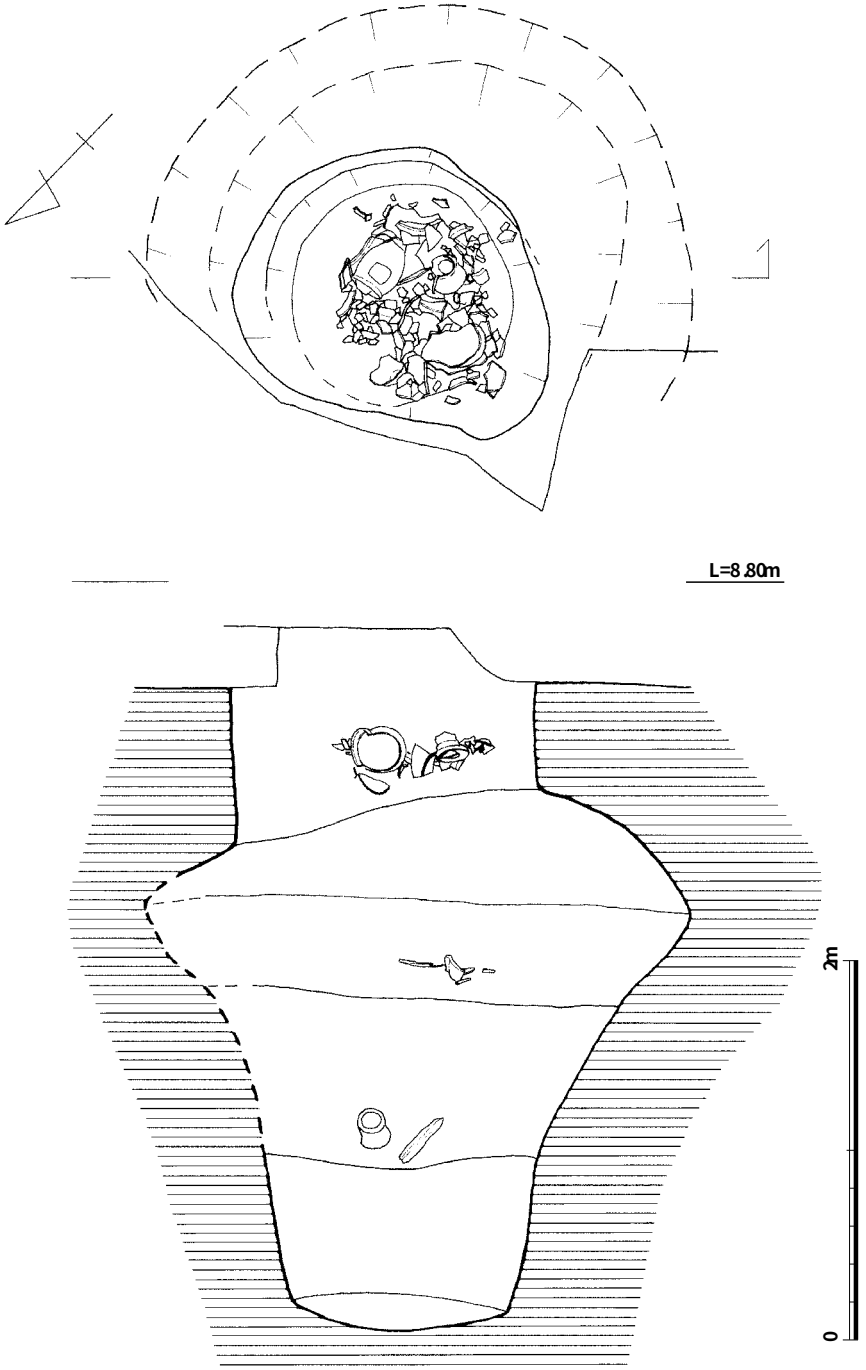


Fig. 4　SE02（1/40）

器高8.6cmを測る。外面ハケメ、口縁から内面はナデ。1mm内外の砂粒・赤色粒子を少量含む。焼成は良好、外面色調は浅黄橙色を呈す。21は筒形器台。1/3～1/6片で、復元口径は12.3cm、鍔部19.3cmを測る。表面は摩滅がひどいが、調整はヨコナデ。胎土は最大4mm砂粒を多く含む。焼成は良好、外面色調はにぶい黄橙色を呈す。22・23は支脚。22は1/2片で、頂部径6.0cmを測る。23は底部で、底径8.7cmを測る。いずれも調整は指押え後ナデ、胎土は22が砂粒に角閃石と雲母粒を少量含む。23は精良。焼成はいずれも不良。外面色調は橙色と灰白色を呈す。

24～32は中層出土。24・25は鋤先口縁壺。頸部には突帯が付く。いずれも口頸部片で、2/5片・1/4片で、復元口径は27.6cm・32.6cmを測る。調整はナデ、突帯部はヨコナデ。胎土は最大3mm内の砂粒や金雲母を多く含み、焼成は良好。外面色調はにぶい褐色とにぶい橙色を呈す。26は頸部が締まり、口縁部が三角を呈す長胴の壺。頸部に三角突帯が付く。底部から胴部2/3、口縁1/3残存で復元口径16.2cm、器高49.0cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、胴部は工具でナデ上げる。胎土は最大5mm内の粗砂、雲母粒を多く含む。焼成はやや不良。外面色調は橙色からにぶい橙色を呈し、下胴と上胴に1条帯状に黒色の変化が見られる。27～29は甕。27は甕の下胴から底部。底径9.3cm、残存高18.5cmを測る。底部には1.5×2.5cmの不整円形で焼成後の穿孔がある。甑に転用したものか。外面摩滅が進み、ハケメ後ナデ消し、内面はナデ調整でススが付着するが、内底穿孔断面部にはススが付着していない。甕の欠損品と思われるが、割れ口が整っており、意図的な打ち欠きとして図化している。胎土は2mm内の砂粒、雲母粒を含む。焼成良好。外面色調はにぶい黄橙色を呈し、部分的に二次被熱で色が変化する。28・29は逆L字形の口縁で、頸部に1条の三角突帯が付く。口径は35.5cm・34.6cmを測る。口縁は28がやや内傾、29が水平である。調整はいずれも外面粗いタテハケメで、口縁部ヨコナデ、内面はナデ。胎土は28が砂粒を少量含むが精良、29は2mm内外の砂粒を少量と雲母粒をやや多く含む。焼成はいずれも良好。外面色調は28が浅黄橙色、29が灰褐色でススが付着し、28は黒斑がある。30は丹塗りの高坏坏部1/3片。復元口径25.4cmを測る。体部と底部の境にM字形突帯が巡る。調整は外面ヨコナデで、外底部と内面は板ナデ。胎土は細砂・雲母粒をわずかに含むが精良。外面には黒斑がある。31・32は鉢。31は1/5片で、復元口径13.6cm、器高11.1cmを測る。調整は外胴下半がハケメ、その他はナデ。胎土は最大3mm砂粒を多く含む。焼成はやや不良。外面色調はにぶい橙色を呈し、黒斑がある。32は完形で、口径17.7cm、器高10.2cmを測る。調整は外面ハケメ、内面はナデ。胎土は最大3mm砂粒を多く含み、焼成は良好。外面色調は橙色を呈す。

33～42は下層出土。33～35は鋤先口縁の広口壺。33は1/2片で、胴部には1条の三角突帯が巡る。口径23.0cm、器高24.1cmを測る。胴部外面は粗いハケメ、頸部外面から口縁部はヨコナデ、内面はナデで指押え痕が残る。34は1/3片で、推定口径22.0cm、器高21.0cm以上を測る。口縁端部は意図的な打ち欠き。調整はナデで、頸部内面にはハケメがかすかに残る。35は口頸部欠損。胴部には1条の断面台形の突帯が巡る。残存高30cmを測る。調整は内外面ナデ。胎土は33が最大2mm内の砂粒を少量含み、34が1mm内の砂粒・赤色粒子・雲母粒を少量含み、35が1mm内の砂粒・雲母粒を少量含む。焼成は33がやや不良で、34・35は良好。外面色調は33がにぶい橙色、34は橙色、35は上半黒褐色から下半橙色を呈す。36は甕棺で下胴部がない。口径は79.6cm、残存高は63.9cmを測る。頸部に1条、下胴に2条の三角突帯が付く。調整は内外面ナデ。胎土は2mm内の砂粒を含むが精良。焼成は良好。外面色調は橙色を呈す。口縁部一部黒化する。37は外面丹塗りの鉢で、口縁部が内湾する形態。完形で、口径15.1cm、器高10.7cmを測る。調整は外面ヘラミガキ、内面ナデで内底は指押え痕が残る。胎土は2mm内砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は赤褐色を呈す。38～40は器台。筒状の器台で、口縁と脚部が外反して開く形態。38は脚部3/4欠、39は完形、40はほぼ完形である。それぞれ口径

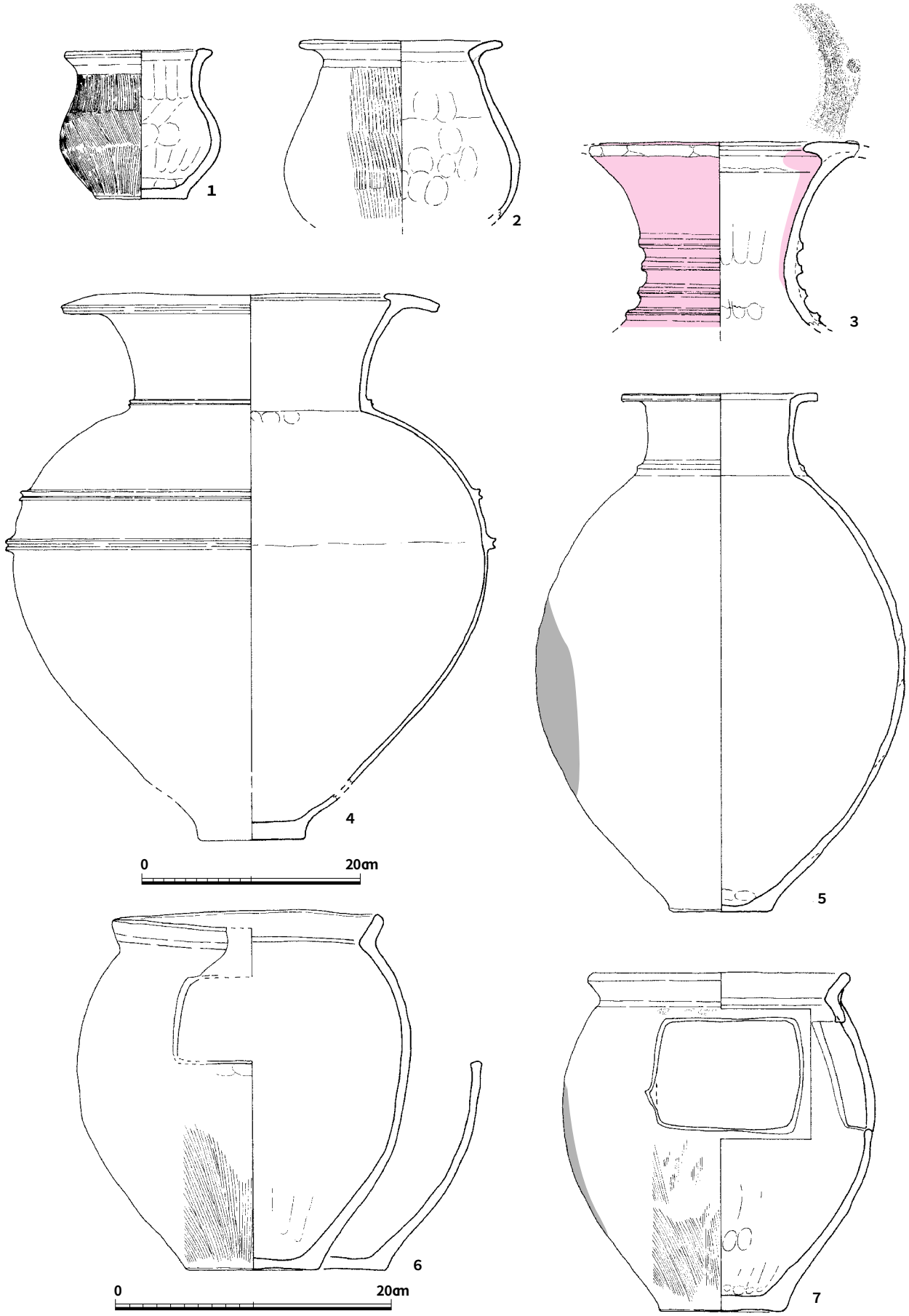


Fig. 5 SE02出土土器①（1/4・1/5）　※1/5は4・5

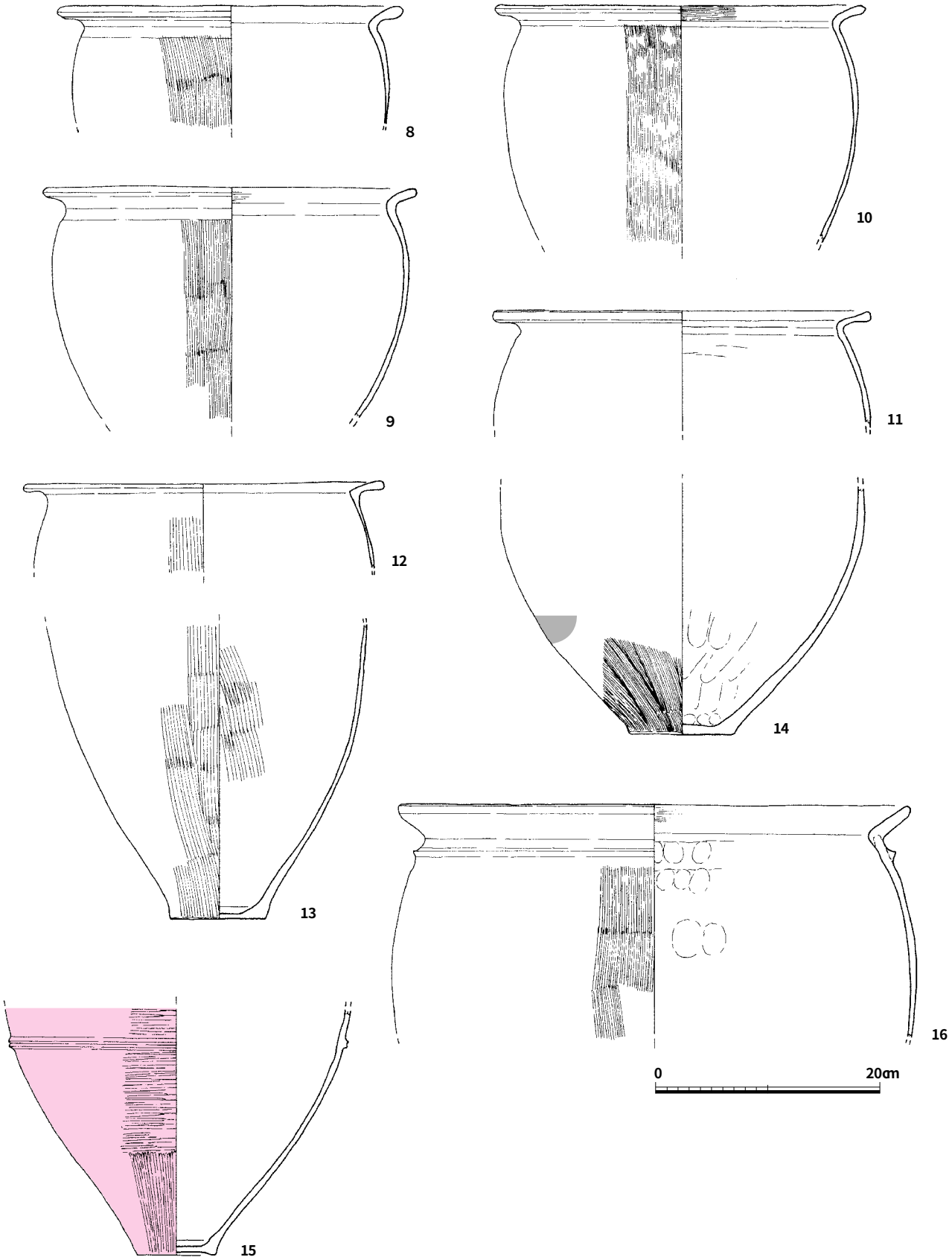


Fig. 6 SE02出土土器②（1/5）

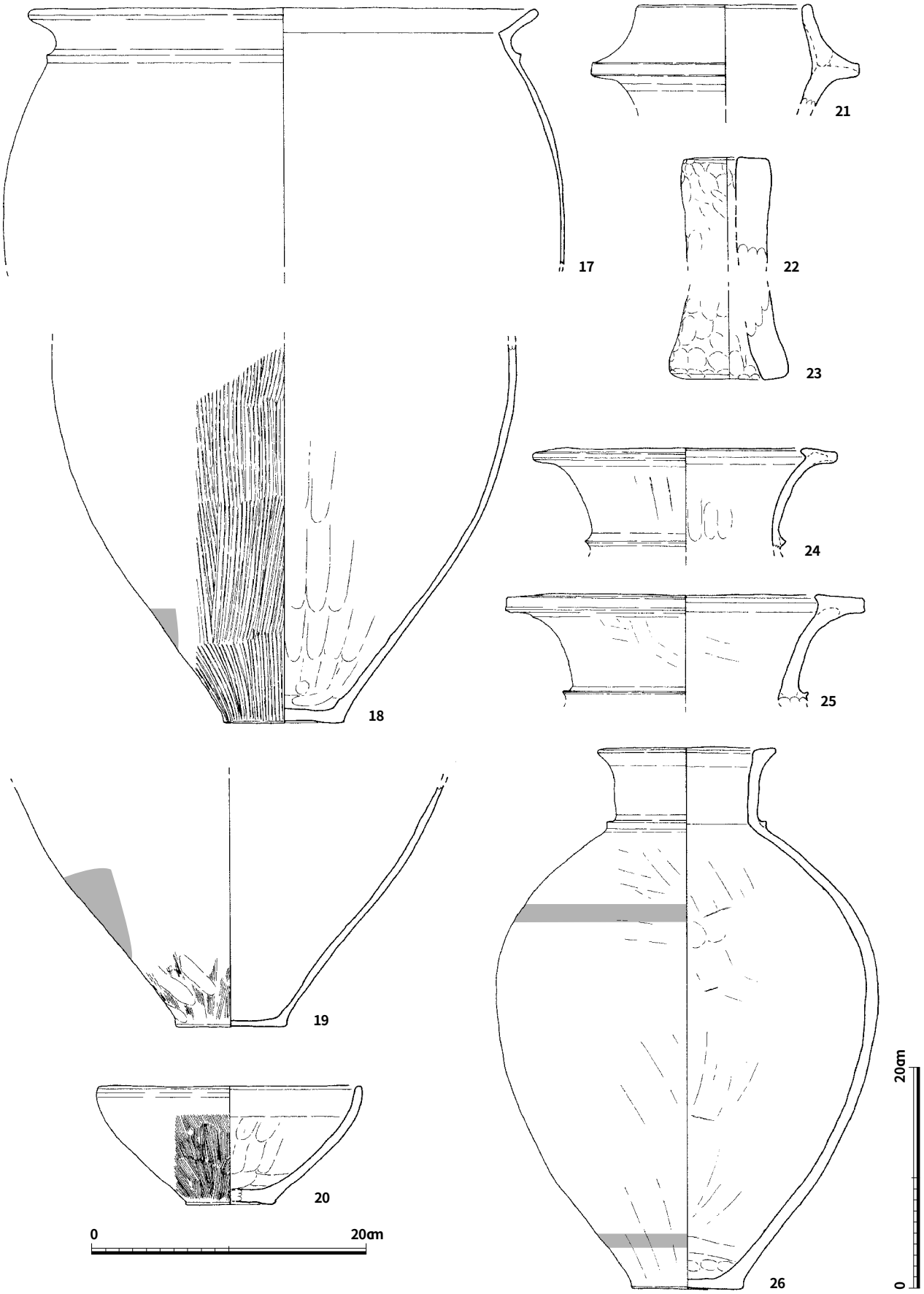


Fig. 7 SE02出土土器③（1/4・1/5）　※1/5は17・18・19・26

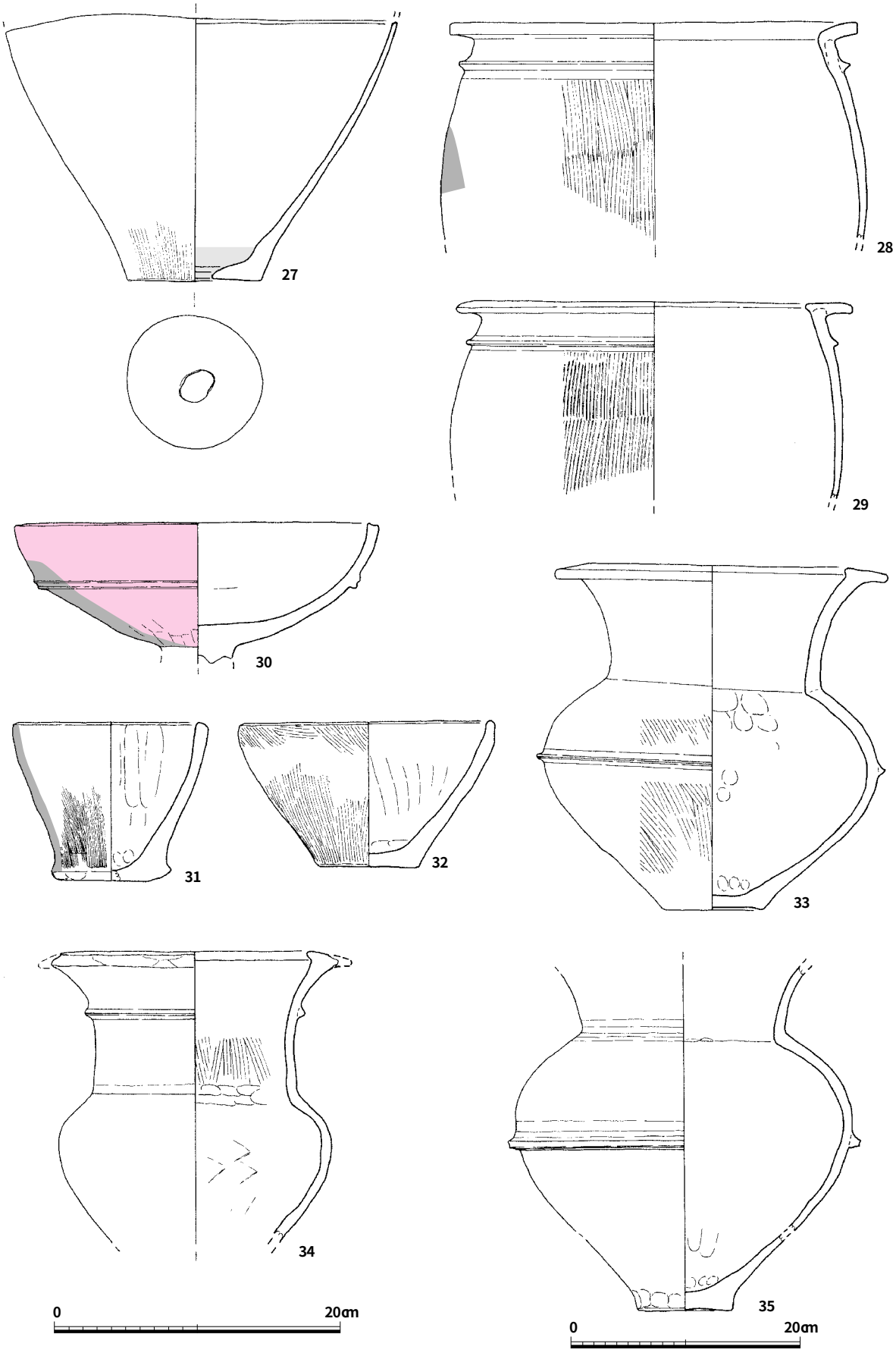


Fig. 8　SE02出土土器④（1/4・1/5）　※ 28・29・35は 1/5

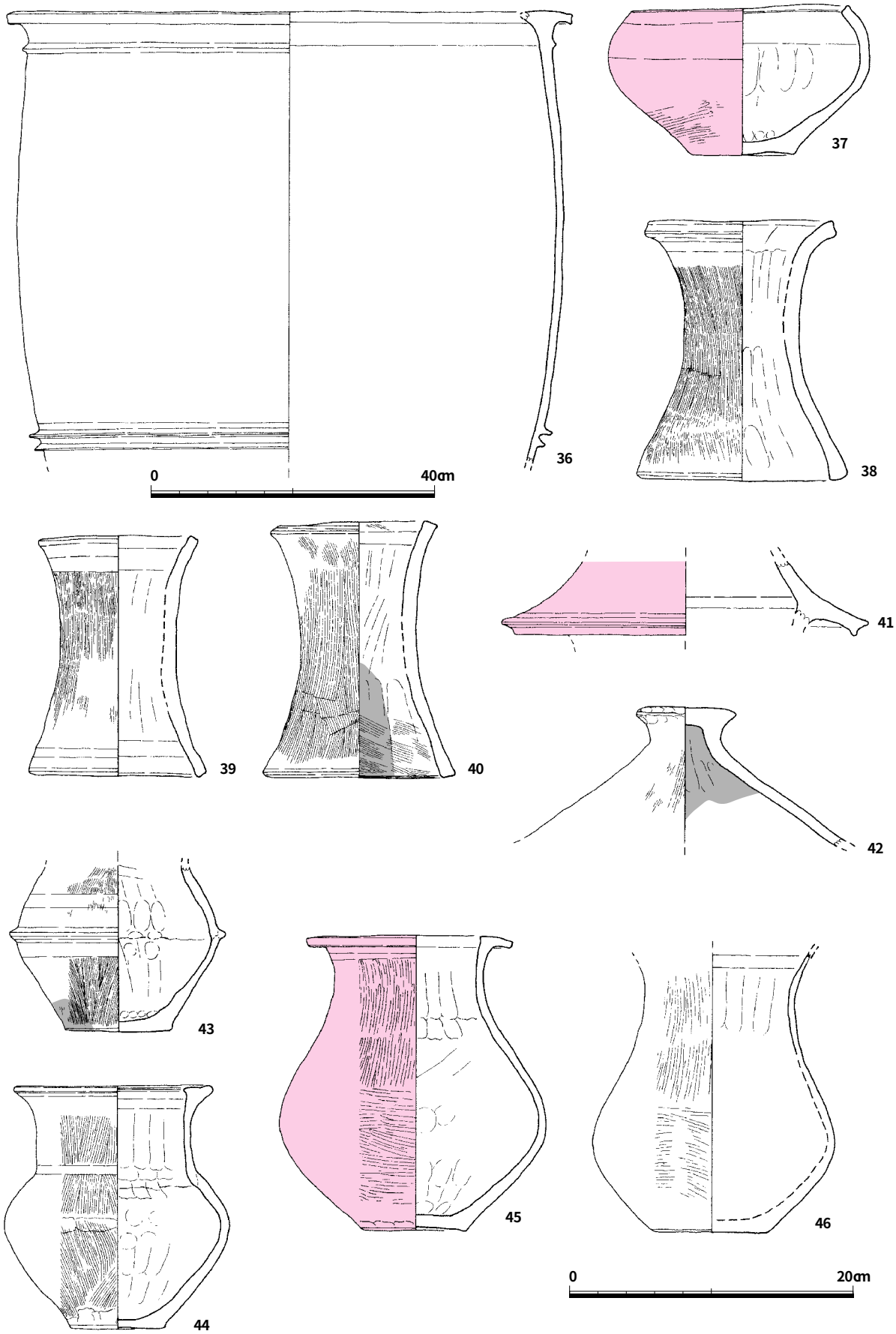


Fig.9　SE02出土土器⑤（1/4・1/8）　※36は1/8

は13.5cm・11.2cm・11.6cm、器高は18.4cm・16.9cm・18.2cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、外面ハケメ、内面ナデで、40の体部内面にはシボリ痕、脚部にはハケメを施す。胎土は38が砂粒を少量含む、39・40は最大3mm砂粒を多く含む。焼成はいずれも良好、外面色調は浅黄橙色である。41は筒形器台の鍔部1/5片。復元鍔部径25.8cmを測る。調整は外面やや摩滅するがヘラミガキ、鍔部と内面はヨコナデ。胎土は精良、焼成は良好。色調は丹塗りで橙色を呈す。42は蓋天井部。外面ハケメ後ナデ、内面ナデで、奥はシボリ痕が残る。内面には黒斑がある。

43～53は最下部、井戸底出土。43～48は壺。43は小型壺。胴部に断面台形の突帯が付く。胴底部1/2片で、復元胴径15.2cmを測る。調整は外面ハケメで突帯部ヨコナデ、内面はナデと板ナデ。胎土は細砂をわずかに含み、焼成は良好。色調はにぶい橙色を呈す。44は頸部が緩く口縁が直立する形態。口縁は鋤形が退化する。口径14.0cm、器高17.2cmを測る。調整は外面ハケメ、口縁部ヨコナデ、内面はナデである。胎土は3mm内砂粒を少量含む。焼成は良好、外面色調は灰褐色を呈す。45・46は鋤形口縁のナデ肩の壺。1/3片と口縁部欠損品。45は外面丹塗りである。口径は15.5cm、器高は20.0cm、残存高19.8cmを測る。調整はいずれも外面ヘラミガキ、内面ナデである。外面色調はにぶい橙色。胎土は45が精良、46は最大2mm内の砂粒・雲母粒を含む。焼成はいずれも良好。47は胴部が算盤形を呈し、復元口径は10.3cm、器高19.6cmを測る、調整は外面ヘラミガキ、内面はナデで、内頸部は指ナデ。内底は指押え痕が残る。外面から口縁内面は丹塗り。胎土は精良、焼成は良好。48は鋤先口縁の広口壺。頸部に断面台形の突帯が1条貼りつく。口縁端部は意図的な打ち欠き。口径(内径)は17.5cm、器高27.8cmを測る。調整は内外面ナデで、口縁部と突帯はヨコナデ。胎土は2mm内砂粒を少量含む。焼成は二次的加熱を受けたのかやや不良。外面色調は橙色を呈するが、胴部上半迄ススが付着す

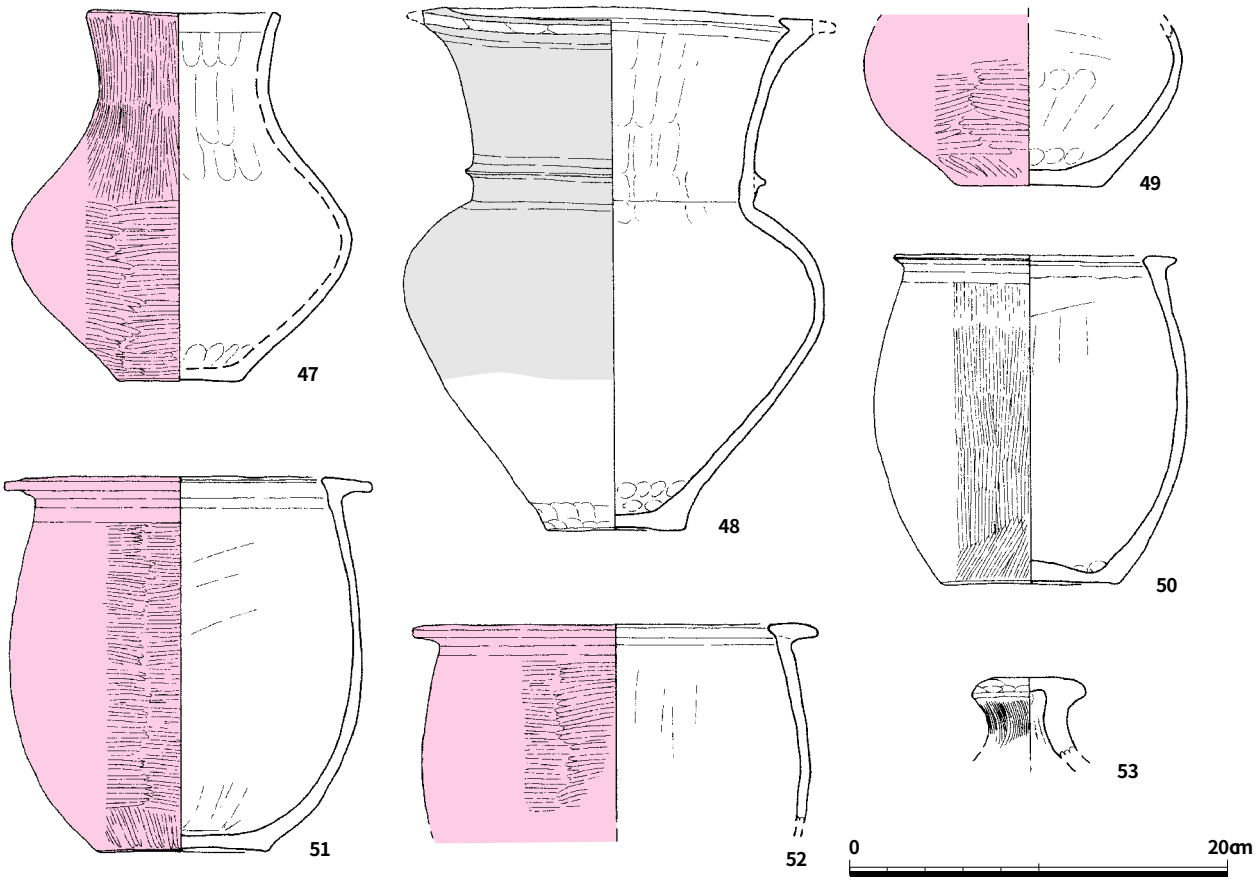


Fig.10 SE02出土土器⑥（1/4）

る。49は丹塗り壺の下胴底部。調整は外面ヘラミガキ、内面はナデで、指押え痕が残る。胎土に2㎜内砂粒・雲母粒を少量含む。焼成は良好。外面色調は明赤褐色を呈す。50～52は甕で、口が窄まり、胴部が膨らむ形態。口縁部は逆L字形を呈す。底部はやや上底である。50は口縁部一部欠損で、口径は14.9㎝、器高17.5㎝を測る。調整は外面ハケメ、口縁部はヨコナデ、内面はナデで、内底には指押え痕が残る。51は口縁から胴部1/2欠損で、復元口径19.5㎝、器高19.9㎝を測る。外面は底部迄ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、内面はナデで、内底近くは板ナデ。52は口縁部1/4片で、復元口径は21.4㎝を測る。調整は外面ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、内面はナデ上げる。胎土は50・51が精良、52は細砂・雲母粒をわずかに含む。焼成はいずれも良好。色調は50が浅黄橙色、51が橙色を呈し、丹塗り痕跡が残る。52は外面丹塗りで明赤褐色を呈す。53は蓋の摘み部。頂部径6.0㎝を測る。外面ハケメ、内面シボリ痕が残る。胎土は3㎜内砂粒多く含む。焼成は良好。外面色調は橙色を呈す。

S1は隅丸長方形を呈す磨石又は敲石。長さ12.7㎝、幅6.6㎝、最大厚3.0㎝を測る。表面は磨られているが、上面と底面に敲打痕が残り、磨りと叩きに使用されたものと思われる。色調は灰オリーブを呈し、石材は砂岩である。

W1は柱の一部と思われる加工材。下層から出土した。残存長は64.4㎝、最大径16.2㎝を測る。上半は腐蝕・傷みがひどいが下端がナナメに削られている。他にも72.0㎝、直径10.0㎝を測る、加工材が1点ある。いずれも樹種は広葉樹と思われる。

SE04(Fig.11、PL.4)

調査区中央部で検出した井戸で、本来平面形状は円形を呈すと思われるが、旧官舎のコンクリート基礎に1/2がかかり、完掘出来なかった。確認規模は長軸長0.86m、掘削深さは1.2mである。埋土は上層が黒褐色粘質土で、ロームブロックを含み、下の方は八女粘土ブロックに変わる。堆積の状況は人為的に埋めた状況を示す。

出土遺物　弥生時代中期中頃以降の甕口縁部細片やミニチュア土器鉢細片などが少量出土したが、図示出来るものはなく、時期も不明。

SE06(Fig.11、PL.5)

調査区南側で検出した平面形状が円形の井戸。一部既存の建物基礎にかかる。規模は上面で直径0.88×0.8m、深さは2.97mを測る。井戸底は最後に断面断割りを行っていないので、推定である。上面から下1.4～1.6mから始まり2.4～2.5mまでの範囲で壁が奥に抉れる。埋土は上層が橙色ロームブロックに黒褐色粘質土が混入し、下層は黒褐色粘土でロームブロックが混入する。堆積の状況は人為的に埋めた状況を示す。井戸底は水気が多くなり、自然遺物が出土した。

出土遺物(Fig.12、PL.9・10)弥生時代後期終末（ⅠB期）頃の土器が井戸底から出土している。

54は在来系(A系統)の単口縁広口壺である(以下の土器の系統分類や編年については、久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIXを参照のこと)。ほぼ完形だが頸部など一部欠損。口径(上端内径)21.8㎝、器高37.2㎝、胴部最大径28.0㎝(突帯外径)、頸部基部(頸部突帯やや上)径15.1㎝、底径8.4㎝。底部は平底気味残る丸平凸レンズ底で、外面はケズリ整形の痕跡あり。外面は、底部～胴部下部はハケ→ケズリ→ナデ、胴部中位に小さな台形突帯、胴部中位以上はタテハケ→一部ナデ(一部にタタキ痕跡)、頸部下に小さな三角突帯、頸部～口縁部はタテハケ→一部ナデ。なお胴部タテハケは上下の突帯貼付後に再度施される。口縁部は丁寧でない整形で(雑なヨコナデ)、器形的に本来は複合口縁になるものが、予定を中止して単口縁にしたものとも思われる。内面は、底部はハケ→強いナデ・ユビオサエ、胴部下半はタテハケ→一部ナデ、胴部突帯裏が横のナデ、胴部上半はハケ→ナデ消し、頸部突帯裏にユビオサエ、頸部～口縁部はハケ→一部ナデ、口縁部

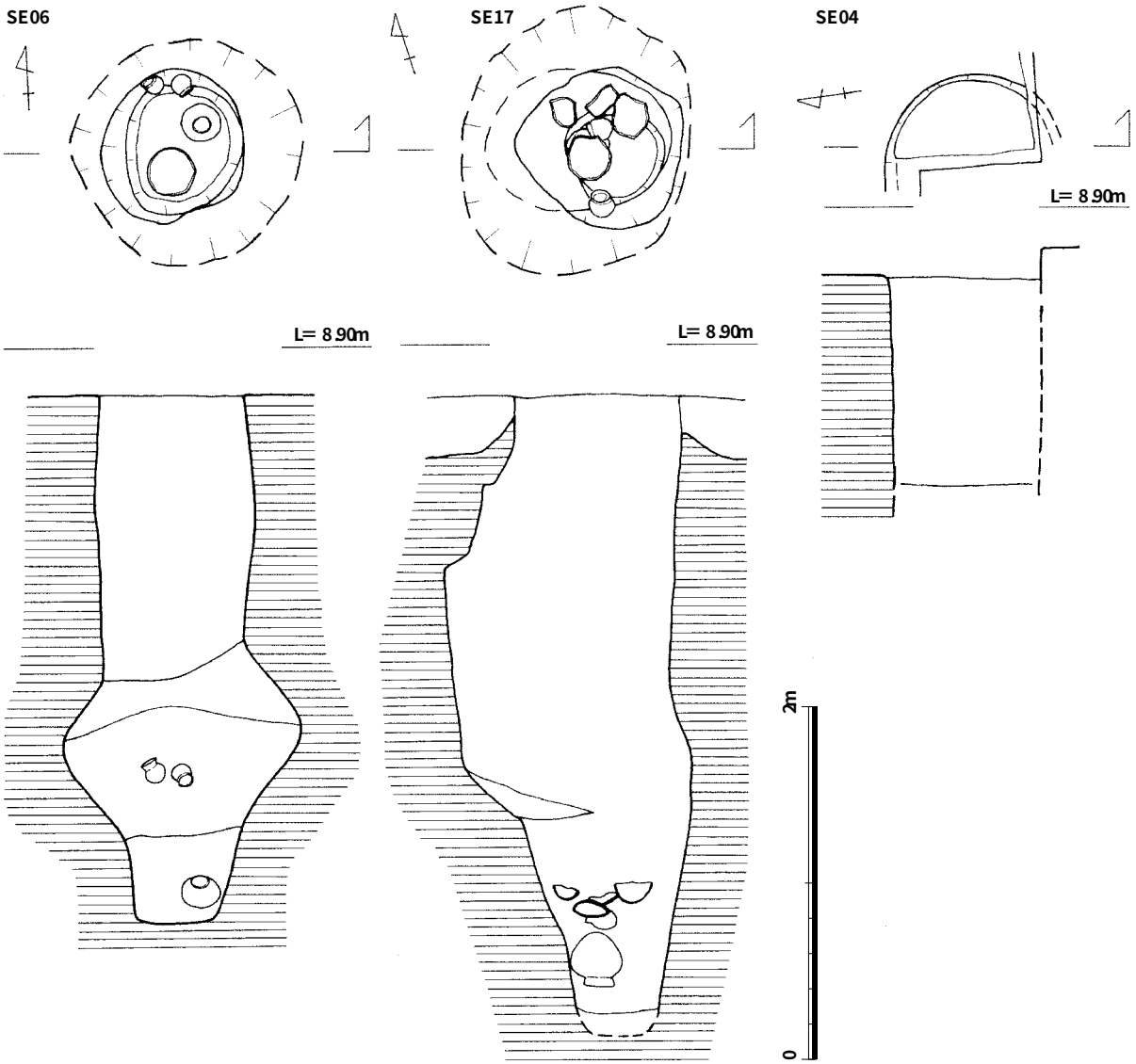


Fig.11 SE04・06・17(1/40)

は雑なヨコナデ。胴部外面の対向２か所と口縁部１か所に黒班。外面が灰白～浅黄橙色、内面は灰白～にぶい橙色。胎土の砂礫は、３㎜以下の石英・花崗岩粒をやや多く、２㎜以下の長石を多く、角閃石微粒を僅か、雲母微細粒をごく僅か含む。

55はＡ系統の複合口縁壺ないし広口壺の胴部下半以下の大きな破片。残存高16.5㎝、復元最大径26.9㎝、底径5.5㎝。底部は大きく剥離するが、もとは丸底に近い凸レンズ底。底部の剥離以外に、器壁の内面側が脆く剥離気味で器壁の芯に粘土状の焼成不良部分が見られ、焼成失敗品である。外面は、底部～胴部下位は(タタキ？→)ハケ→ナデ(ケズリ気味)、胴部中位はタタキ→タテハケ。内面は、底部はハケ→強いナデ、胴部は(整形ユビオサエ→)ハケ→一部ナデ。外面が浅黄橙～淡橙色、内面が灰褐～にぶい褐色。胎土の砂礫は、２㎜以下の花崗岩粒・長石・石英が多く、２㎜以上の石英も含む。雲母微粒がやや多く、角閃石小粒を少量含む。胴部外面中位に黒班あり。

56はＡ系統の小型複合口縁壺。底部は欠損するが大きな破片。口縁部屈曲部に明瞭な稜は無く袋状に近いが、このような頸部が太く短く、また調整の粗いものは弥生時代終末前後である。胴部外面はタテハケ？→ナデ(ミガキに近いナデ)、口縁部は内外ともに雑なヨコナデ、胴部内面はハケないし

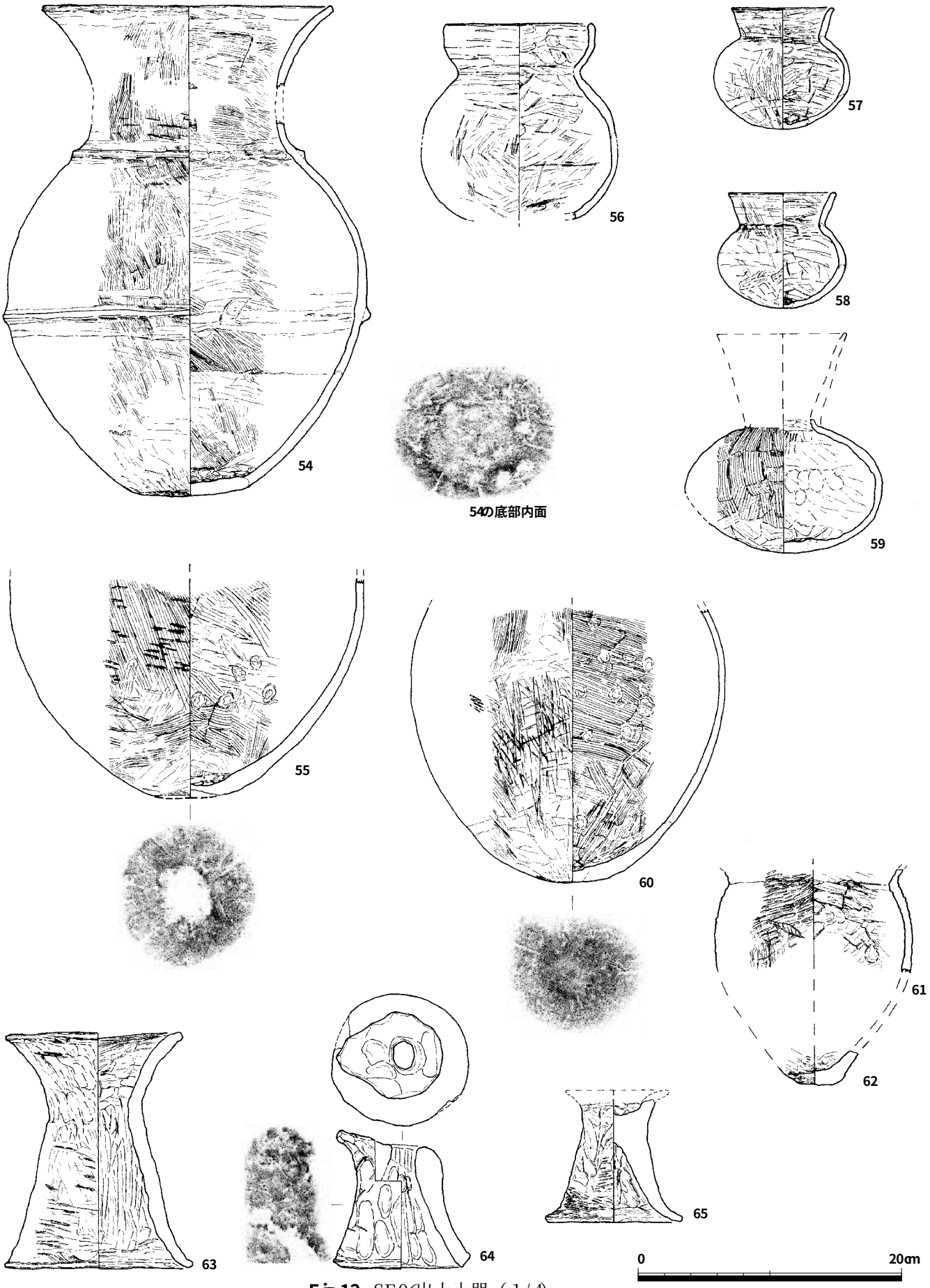


Fig.12 SE06出土土器（1/4）

板ナデ→ナデ。復元口径 11.6cm、復元最大径 14.9cm、頸部径 9.2cm、残存高 14.8cm。外面が灰黄褐～にぶい黄橙色、内面は（淡）灰褐～にぶい黄橙色。胎土の砂礫は、3mm以下の石英・花崗岩粒や2mm以下の長石を多く含み（石英はかなり多）、雲母板状微粒をやや多く、角閃石微粒を少量含む。

57・58は底部や口縁部の成形からB系統（伝統的V様式系変容）の小型直口丸底壺である。いずれも完形。57は口径 7.6cm、頸部径 6.5cm、器高 9.2cm、最大径 10.4cm。外面は、底部付近ナデ、体部ナデ→縦ミガキ、頸部前後（体部上・口縁部下）タテハケ痕跡、口縁部ヨコナデ。内面は、底部ナデ・ユビオサエ、体部は横の板ナデ→ナデ、頸部は横のハケ→ヨコナデ、口縁部ヨコナデ。底部内面中央に充填部の小さい突出がある。外面は橙～浅黄橙色、内面にぶい橙色。口縁部内側に小黒班。胎土の砂礫は、3mm以下の石英・花崗岩粒が多く、2mm以下の長石やや多く、雲母微粒を含み、角閃石微粒を僅かに含む。58も同様の砂礫構成。58は口径 7.9cm、頸部径 6.5cm、器高 8.8cm、最大径 9.7cm。外面は、底部付近～体部下位はケズリ調板ナデ→ナデ、体部中位以上はタテハケ→ナデ、口縁部タテハケ→ヨコナデ。内面は、底部ナデ（充填部に凹み）、体部は板ナデ→丁寧なナデ、頸部付近横のハケ→ナデ、口縁部はナナメハケ→ヨコナデ。外面が明赤褐～橙色、一部浅黄橙色、内面は明赤褐色。

59は頸部以上を欠如するが、長頸壺であろう。逆円錐台部的な体部の成形画期からB系統か。体部から頸部への接合部はヨコナデされ擬口縁状に剥離する。頸部径 5.8cm、体部最大径 15.0cm、残存高 10.1cm。底部はほぼ丸底。外面は、底部付近は（ハケ？→）ケズリ→ナデ、体部中位以上はタテハケ。内面は、底部中央にハケ痕跡、他は（成形ユビオサエ痕→）ナデ、頸部下（体部最上位）にシボリ痕。最大径付近外面に横に黒班。外面が浅黄橙～淡黄色、内面は浅黄橙～にぶい黄橙色。胎土の砂礫は、2mm以下の石英が多く、同じく長石・花崗岩粒がやや多く、雲母微粒と角閃石微粒もやや含む。

60は一見在来系甕の器形だが、底部付近の調整や逆円錐台部（底部から 4.5cm前後高まで）の形成からはB系統技法がベースにあり在来系甕を模倣したものと考える。残存高 20.9cm、復元最大径 23.9cm、底径 4.2cm。外面は、底部付近が（タタキ？）→ハケ→ナデ、胴部中位前後が右上の細かいタタキ痕跡→ハケメ（粗い条痕のものと不明瞭で細かい条痕のものがある）、胴部上位はタテハケ（普通のやや細かい条痕）→一部ナデ。内面は丁寧な調整で、底部～胴部下位は（成形ユビオサエ→）左上ナナメハケ→ケズリ気味タテハケ、胴部中位以上は（成形ユビオサエ→）密な左上ナナメハケ。ハケメ工具は計3種。底部は内面中央に凹みがあり充填部とみられ、小凸レンズ底で不安定な底部である。胴部外面に黒班が複数箇所ある。内外面とも浅黄橙色。胎土の砂礫は、2mm以下の長石・石英・赤色砂礫が多く、花崗岩粒2mm以下を含み、雲母板状微粒をやや多く、角閃石微角粒を少し含む。

61は畿内伝統的V様式系（B系統）の甕。口縁部上半と胴部下半以下を欠如。残存高 8.7cm、復元最大径 15.0cm。外面は、胴部～口縁部下半まで右上タタキ、胴部中位以下にケズリ気味ハケメ。内面は、胴部が板ナデ→ナデ、口縁部ナデ。内外面ともにぶい黄橙色。胎土の砂礫は、2mm以下の花崗岩粒・長石・石英が多く、雲母微粒がやや多く、角閃石微粒を僅か、赤色混和粒子を僅かに含む。62もB系統甕の底部。突出気味小平底だが不安定である。底径 2.5cm、残存高 2.5cm。61と同様の器形になるだろうが必ずしも同一個体ではない。外面はタタキの痕跡があり、ナデ仕上げ。底部付近はケズリ的な調整がなされ平底を小さく不安定にする。内面はハケ？→ナデ。外面がにぶい褐～にぶい橙色、器壁断面が褐灰色、内面が黒色。胎土の砂礫は、3mm以下の花崗岩粒・石英（赤色砂礫含む）を多く、2mm以下の長石をやや多く、雲母微粒を含み、角閃石微粒をごく僅か含む。

63はA系統の器台。完形。口径 12.8cm、器高 17.9cm、裾部径 13.8cm。外面は凹凸のある雑なユビナデ、筒部下半～裾部にタタキが残る。内面も主に同様に雑なユビナデ。受部は横の板ナデ、裾部は横のナデ、筒部はシボリ→縦のユビナデ。外面がややにぶい橙色、内面にぶい赤褐～にぶい褐色。胎

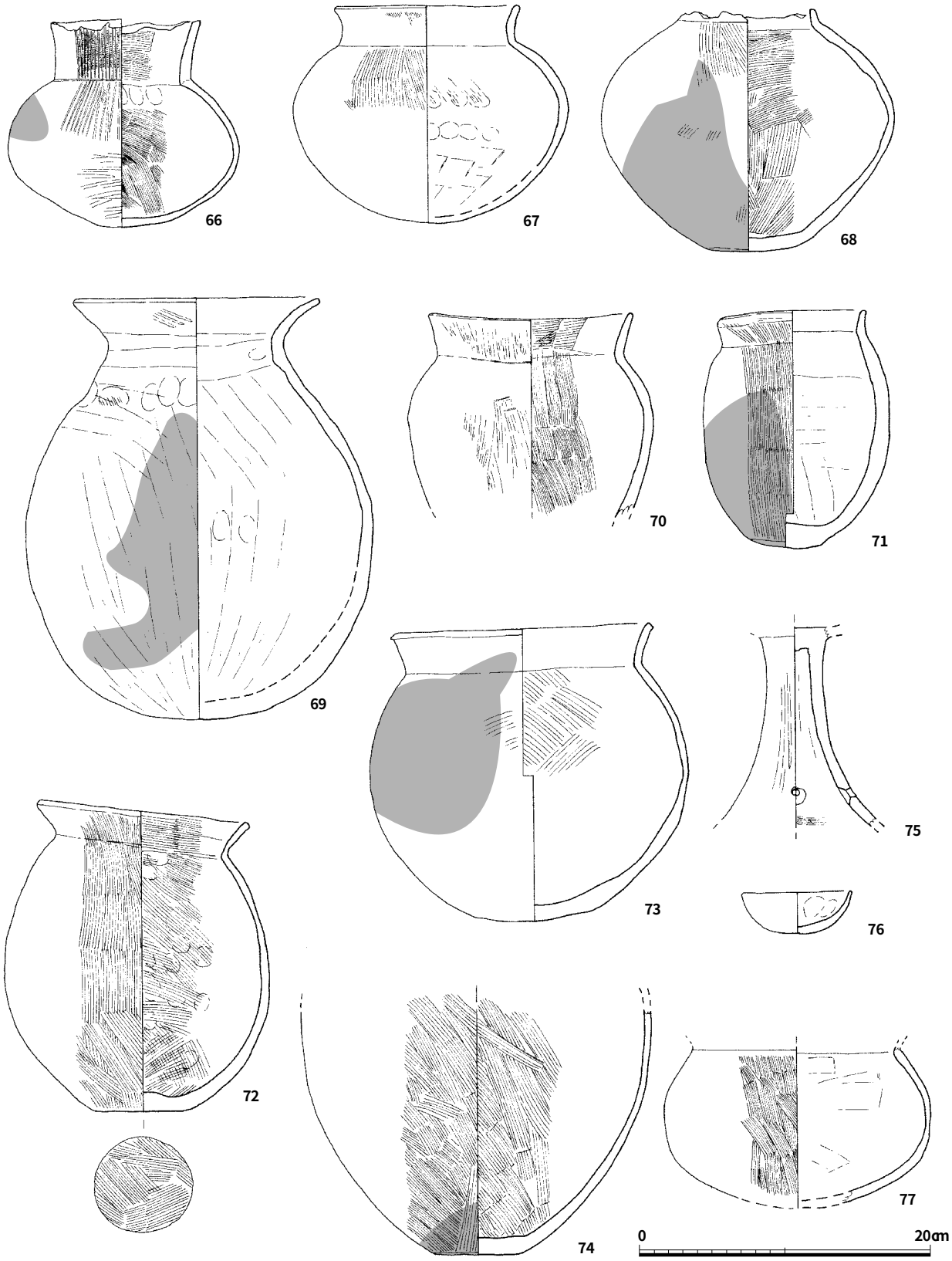


Fig. 13　SE17出土土器（1/4）

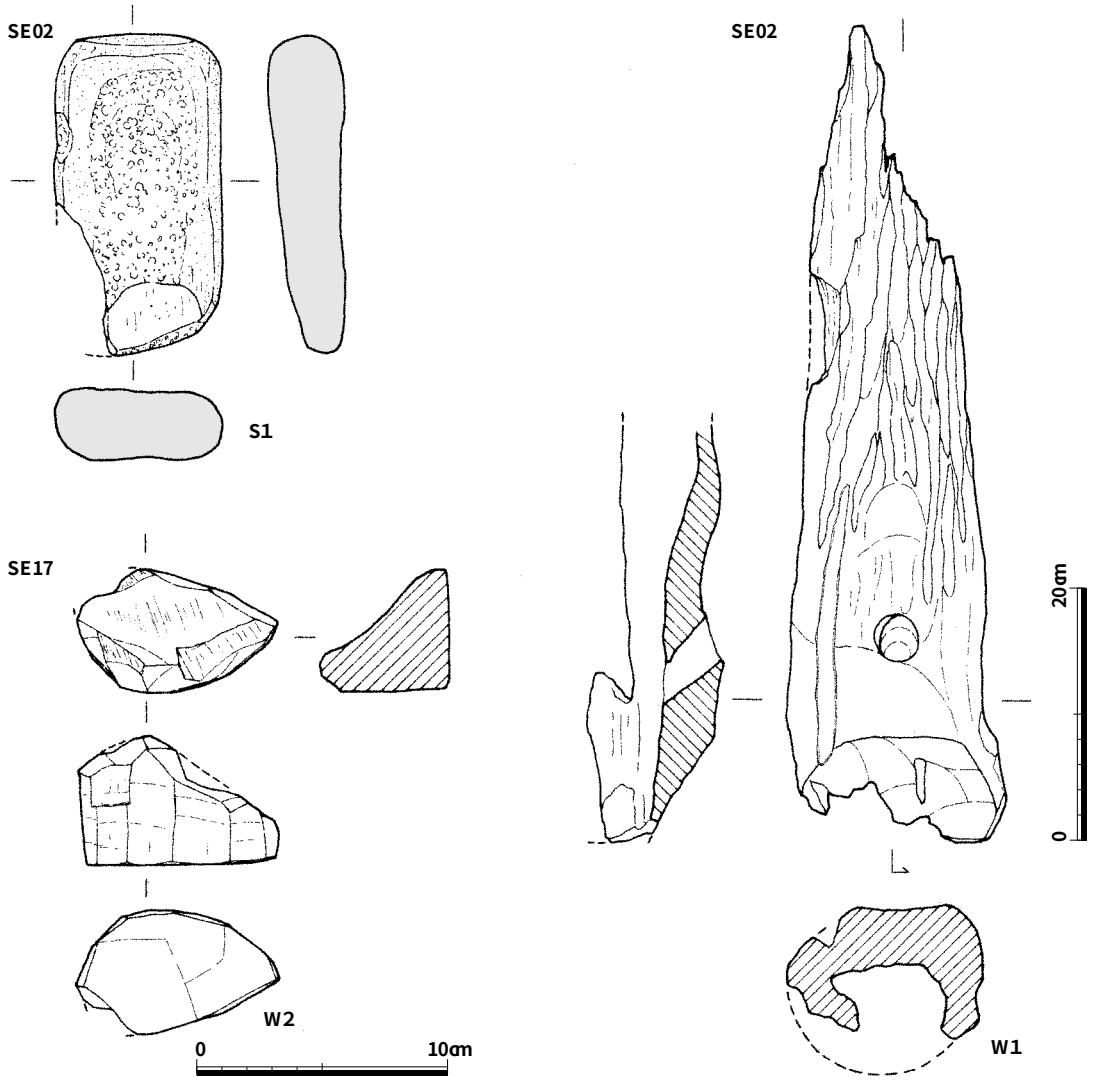
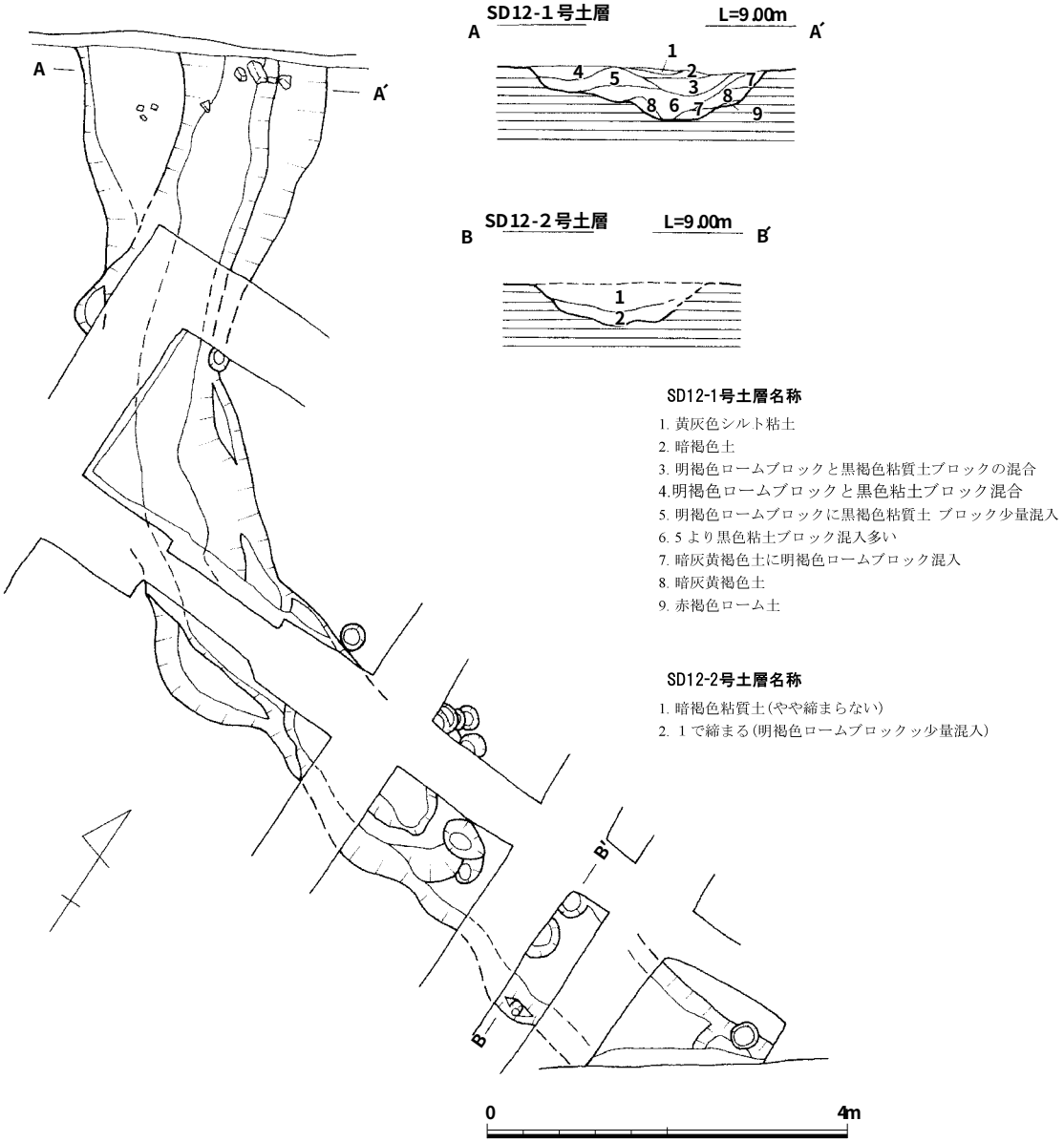


Fig.14 SE02・17出土石器・木器(1/3・1/6) ※S1・S2は1/3 W1は1/6

土の砂礫構成は56に類似する。64はA系統の沓形器台。ほぼ完形(一部欠損)。上面が斜めであり片側が突出する。器高10.6cm、上面径6.6×8.1cm、裾部径9.0cm。外面は、筒部～裾部が凹凸のあるユビナデだがタタキの痕跡がある。上面はユビナデ。内面は凹凸のあるユビナデ、上部の孔はシボリ(棒状工具に粘土巻き付けか)。内外面とも橙色、内面は一部褐灰色胎土には3mm以下の長石・石英を多く含む。65は器台だが、体部が中実な作りなどB系統高坏の柱状部に共通し、B系統技法による可能性がある。残存高9.3cm、裾部径10.1cm。口縁部(受部)を欠損。外面は、裾部は右下ないし水平のタタキ→一部ナデ、爪先痕が連続的に残る。筒部はやや右上のタタキ→ナデ消し。内面はシボリ→ナデ、裾部は板ナデ→ナデ。外面は灰白～褐灰色、内面は灰黄褐色。胎土の砂礫は、2mm以下の長石・石英・花崗岩粒を多く、雲母板状微粒をやや多く、角閃石ないし輝石微粒を僅かに含む。

以上のSE06の土器群は、55の推定底部形態や60の底部はⅠB期に多いものである。また54の底部形態は古相をとどめるが(ⅠA期に多い)、57～62のようなB系統土器の存在やその型式など、総体的に見てⅠB期の一括資料と言える。近在の那珂八幡古墳周溝下部のⅠB期の井戸(34次SE03・05)もA系統が大半で一部のB系統土器が共伴するが、本井戸も同様である。ⅠB期の比恵・那珂遺跡群では庄内甕等のC系統土器群が出現しているが、これら3井戸では共伴せず、那珂八幡古墳築造(ⅠB期新相)直前のこの地区の土器相を示す。またB系統としたものの一部には一見A系統的器形のも



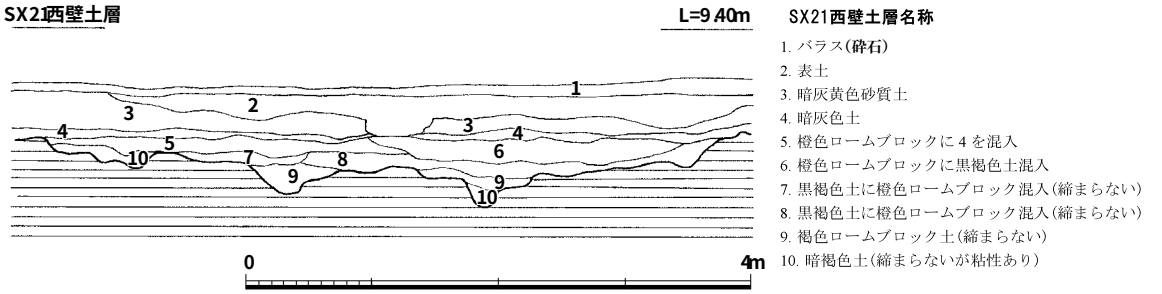


Fig. 15 SD12、SX21土層（1/80・1/60）※土層は 1/60

のがあり、比恵・那珂周辺には多く散見され、観察や分類・時期比定の際に注意を要する。

SE17(Fig.11、PL.5)

調査区中央部で検出した平面が不定形を呈す井戸。上面一部撹乱を受けるが、規模は0.95×0.91m、深さは3.5mを測る。井戸は八女粘土迄掘り抜いている。上面から0.5～1.6mから壁は奥に崩落・抉れがある。埋土は上層が黒褐色粘質土で、下層はロームブロックに黒色粘土が混入し、単一である。井戸底での湧水はないが、ヒョウタンなどが出土している。

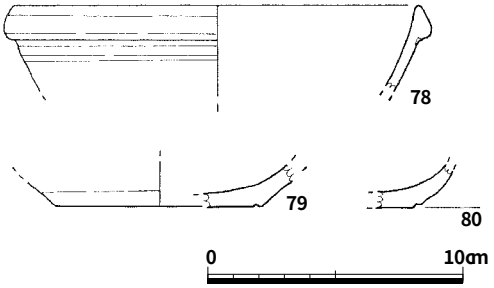


Fig.16 SD12出土土器(1/3)

出土遺物(Fig.13・14、PL.10)井戸底から弥生時代後期後半から終末期の土器が完形で出土している。

66～69は壺。66は扁球気味の胴部からやや外に開く口縁を持つ長頸壺。口縁部を欠損する。残存高14.2cmを測る。調整は、外面口縁は細かいヨコハケメ後タテヘラミガキ、上胴部はタテの細いヘラミガキで、下胴部はヨコ・ナナメヘラミガキ。内面は細かいハケメ。胎土は2mm内砂粒・雲母粒を多く含み、焼成は良好。外面色調は黒褐色を呈し、黒斑がある。67は短頸の広口壺。ほぼ完形。口径は12.7cm、器高14.9cmを測る。調整は外面上半がハケメで口縁部はナデ、下半部は丁寧なナデ。内面はナデで、下半は工具痕が残る。胴上半にはハケメが残る。胎土は3mm内砂粒多く含む。焼成は良好。外面色調はにぶい黄橙色を呈し、3か所黒斑がある。68の底部は平底の名残を残す。頸部は意図的な打ち欠き。最大胴径20cmを測る。調整は外面ナデで上半ハケメ。内面はハケメで工具痕残る。胎土は粗砂粒多く含み、焼成は良好。外面色調は黒斑がある。69は長胴で下膨れ。1/3片欠損。口径16.8cm、器高28.9cmを測る。調整は外面工具によるナデ上げ、口縁部内外はヨコナデ、内面はナデ上げる。口縁外面僅かにタタキ痕が、肩部にはハケメが残る。胎土は2mm内砂粒を含み。焼成は良好。色調はにぶい橙色を呈す。70～72は小型甕。70は口縁から胴部2/3片で、口径は14.0cmを測る。調整は外面ハケメ後ナデ、内面はハケメで工具痕が残る。胎土は2mm内砂粒を少量含み。焼成は良好、外面色調はにぶい黄褐色を呈す。71は頸部が締まらない形態。歪みが大きく、器壁は厚手で粗雑な作り。ほぼ完形で、口径10.2cm、器高16.3cmを測る。調整は外面ハケメ、外底と内面ナデ、底部はケズリ後ナデか。胎土は2mm内砂粒多く含む。焼成は良好堅緻。外面色調は橙色でまだらに黒斑が入る。72は口縁が傾き、胴部が丸みを持つ形態。口縁部を1/6欠き、復元口径は14.6cm、残存高19.9cmを測る。調整は内外面ハケメ、胴内面には指押え痕が残る。胎土は2mm内砂粒を含む。焼成は良好堅緻。外面色調はにぶい橙色を呈す。73は広口口縁で、丸みを持つ胴部の1/2片。復元口径17.9cm、器高20.1cmを測る。調整は外面丁寧なナデ、口縁部ヨコナデ、胴内面は丁寧なナデで、上半は粗いハケメが残る。胎土は2mm内の砂粒を多く含み、焼成は良好。外面色調は全面黒色を呈す。74は下胴部1/3片。底径6.1cmを測る。調整は内外面ハケメで工具痕が内底に残り、外底はナデ。胎土は6mm内の粗砂粒を多く含む。焼成は良好堅緻。外面色調はにぶい黄色を呈す。75は高坏脚部片。外面はヘラミガキ、内面は摩滅するが、奥はケズリ後ナデ、裾部はハケメが残る。裾部に径7mm円形穿孔が1か所残る。胎土は2mm内砂粒・雲母・褐色粒子を含む。焼成は良好。色調は赤褐色を呈す。76は手づくねの小型の皿形の鉢。1/2片で、復元口径9.2cm、器高3.9cmを測る。胎土は黒色粒を含むが精良。焼成は良好。外面色調は浅黄橙色で黒斑がある。77は口縁と底部を欠く鉢。1/2片で最大胴径18.4cmを

測る。調整は外面細かいハケメ、内面は丁寧なナデで、工具痕が残る。胎土は３㎜内砂粒を多く含む。焼成は良好堅緻。外面色調はにぶい褐色を呈す。

Ｗ2は不明加工材。長軸長８.1㎝、短軸長５.0㎝、高さ５.1㎝を測る。各面ケズリを加えている。芯持ち材で針葉樹か。

② 溝状遺構（SD）

SD12（Fig.15、PL.2・7）

調査区南側から西側に、東西から北に丸みを持って延びる溝で、北側の道路部の調査ではこの延長が検出されている。また西側の第62次調査区で、この溝の東西方向の延長線上に溝が確認されており、間をあけて溝があることが確認出来る。溝は南側では建物基礎がかかり全容は不明であるが、北側では幅２.60m、深さ０.6mを測る。埋土は北側ではロームブロック土に黒褐色や黒色土が混じる混合土が主体、東側では暗褐色粘質土であるが、建物基礎内のコーナー部分では上層はローム土で埋まっており、意図的に埋めた状況を示していた。ある時期に埋めて通路にしていた可能性がある。

出土遺物（Fig.16・18）弥生土器から須恵器、中世土師器・瓦質土器・白磁片が少量、他には板碑片なども出土している。大半が細片で、図示し得るものも少ない。

78は白磁碗Ⅳ類の玉縁口縁片。復元口径16.2㎝を測る。灰オリーブ釉がやや厚めに掛かる。6区上層出土。79・80は土師器の坏又は皿の底部細片。79は復元底径８.2㎝を測る。口縁が開く形態で15世紀代のものか。いずれも表面は摩滅し、調整は不明。80の外底は回転糸切り。胎土は79がやや粗く、80は精良。焼成はやや軟質で、色調はいずれもにぶい黄橙色を呈す。

Ｓ2は三角形を呈す割石で、上面が磨られてツルツルし、砥石の可能性がある。長さ13.0㎝、幅10.3㎝、厚さ４.1㎝を測る。側面は粗割面、側面は自然面のようである。二次的加熱を受け、にぶい赤褐色を呈す。石材は砂岩。Ｓ3は板碑片。上下端、右側面は欠損している。残存長軸長22.0㎝、短軸幅14.9㎝、厚み15.3㎝を測る。上面は平滑に仕上げるがタガネ痕が残り、線刻らしきものが右側に認められる。底面は粗割仕上げ。色調は暗灰黄色を呈す。石材は砂岩である。

③ 土坑（SK）

SK01（Fig.17、PL.6）

調査区北側で検出した平面形は隅丸長方形を呈す土坑。主軸は南北を取る。規模は長軸長１.36m、短軸幅84㎝、深さは０.25mを測る。底面は南側がテラスを呈す。埋土は黒褐色粘質土で橙色地山ロームブロックを混入する。形状から土壙墓の可能性があるが、副葬品などはない。土坑の西側がピットと切り合い、底面凹凸がある。

出土遺物（Fig.18）弥生土器から糸切の中世土師器細片を含む。細片が多く、遺構の切り合いもあることから、図示した遺物は必ずしも遺構の時期を示すものではない。

81は弥生土器の小型壺胴部小片。器表面は摩滅がひどく、調整は不明。胎土は３㎜内の砂粒を多く含む。焼成はやや不良。外面色調は灰色を呈す。

SK03（Fig.17、PL.6）

調査区中央部で検出した平面形が不整方形を呈す土坑。中央部は埋設管で撹乱を受ける。主軸は北西から南東を取る。規模は長軸長１.4m、短軸幅１.0m、深さは０.4mを測る。中央部はピット状に深くなる。埋土は暗褐色土・黒色土・橙色ロームブロックの混合土で、人為的に埋戻した状況を示す。

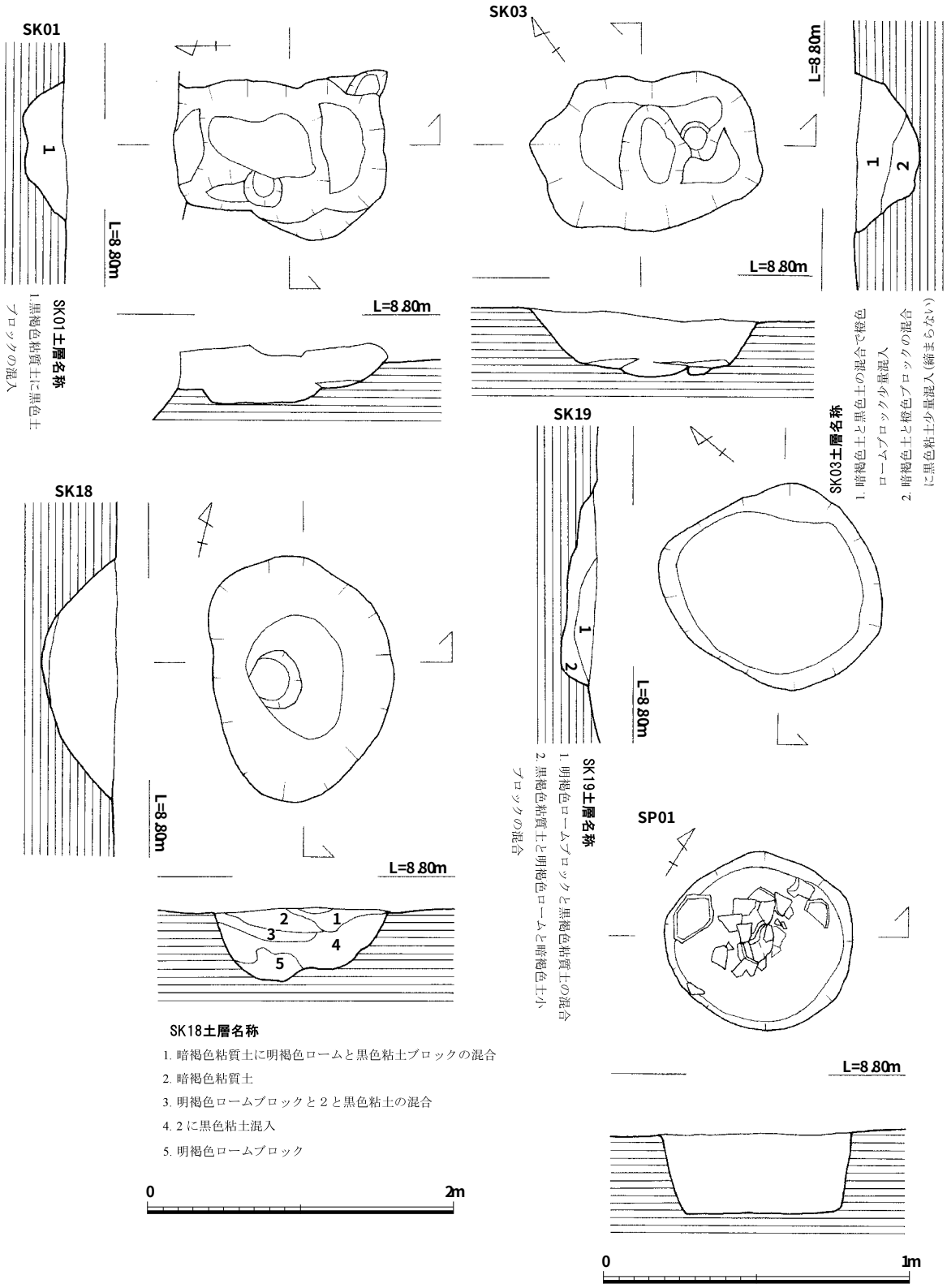


Fig. 17　SK01・03・18・19、SP01（1/20・1/40）

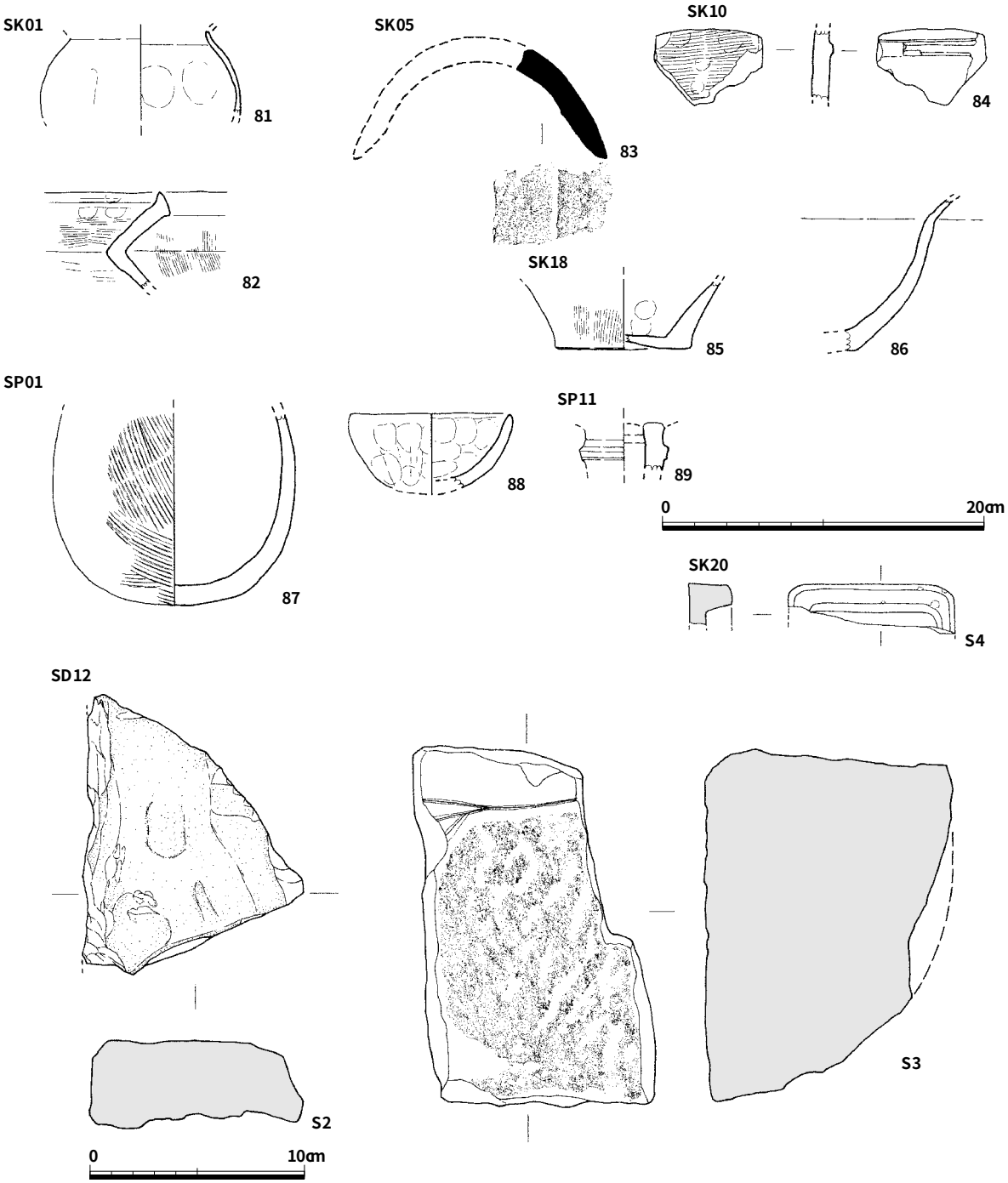


Fig.18 SK01・05・10・16・18、SP01・11出土土器、SD12、SK20出土石製品（1/3・1/4）

出土遺物　弥生土器から中世土師器・瓦質土器細片を少量含む。時代は中世か。

SK05（PL.6）

調査区南側で検出した楕円形状の土坑で、南半は建物基礎に掛かる。確認規模は長軸1.0m以上、短軸幅は0.9m、深さ0.21mを測る。埋土は、上層はにぶい赤褐色ロームに黒色粘土、下層は暗褐色土である。

出土遺物（Fig.18）土師器（底部糸切り）や須恵器・白磁の細片を少量含む。

82は須恵質の丸瓦で、８.5cm程の細片。復元幅15.8cmを測る。外面はナデ、側面はヘラ切り、内面はナデで布目痕が残る。胎土は３mm内粗砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は灰色を呈す。

SK10(PL.7)

SK05の北側で検出した。埋設管に切られ、SK09・14土坑と切り合う土坑で、主軸は略東西を取り、平面形は長楕円形を呈す。規模は長軸長1.60m、短軸幅0.84m、深さ0.28mを測る。底面南東端はテラスを呈す。埋土は橙色ロームブロックに暗褐色土を混入する。

出土遺物 (Fig.18) 土器と瓦質土器細片を少量含む。

83は瓦質土器火鉢の口縁部細片。外面には突帯が貼り付く。全体に摩滅するが、調整は外面ナデ、内面は粗いヨコハケメ。胎土は緻密で精良。焼成はやや軟質。色調は褐灰色を呈す。

SK16出土遺物 (Fig.17)

84は壺で、跳ね上げ口縁細片。表面は摩滅するが、外面タテハケメ、内面は粗いヨコハケメである。胎土は３mm内砂粒を多く含み、焼成はやや不良。外面色調は浅黄橙色を呈す。

SK18(Fig.17、PL.7)

調査区中央南側で検出した楕円形状の土坑。規模は長軸長1.60m、短軸幅1.16m、深さは0.37mを測る。底面の南側はピット状に深くなる。埋土は暗褐色土と黒色粘土、明褐色ローム土の混合で、人為的に埋めた状況を呈す。

出土遺物 (Fig.18) 弥生土器と思われる土器細片、混入と思われる焼締め陶器細片が１点出土。

85は弥生時代中期甕底部1/4片。復元底径8.4cmを測る。表面摩滅するが、外面にはハケメがかすかに残る。胎土は２mm内砂粒少量含む。焼成やや不良。色調は明赤褐色を呈す。86は鉢細片。表面摩滅し、調整は不明。胎土は４mm内粗砂粒・雲母・角閃石を含む。焼成は不良。色調は浅黄橙色を呈す。

SK19(Fig.17、PL.6・7)

調査区南側、SX21を切る円形土坑。規模は長軸長1.50m、短軸幅1.30m、深さ0.2mを測る。埋土は黒褐色粘質土と明褐色ロームの混合である。堆積は人為的に埋めた状況を呈す。

出土遺物 弥生土器の甕の破片が少量出土しているが、遺構の時期はそれより新しい。

SK20(Fig.17、PL.7)

調査区北壁に掛かる平面不整長方形の土坑。確認規模は長軸長1.2m以上、短軸幅1.0m、深さ0.25mを測る。底面南側ピット状に一段下がる。埋土は暗褐色土で黒褐色土ブロック混入する。

出土遺物 (Fig.18) 弥生から古墳時代頃の土器細片、須恵器細片を少量出土したが、上面から硯・近世瓦細片が少量出土。遺構としては古墳時代以前であろう。

S4は上層から出土した硯小片で混入品である。長さ2.3cm、幅7.8cm、高さ2.0cmを測る。色調は灰色を呈し、石材は粘板岩である。

④ 不明土坑・ピット

不明土坑(SX)

SX21(Fig.15、PL.6)

調査区西側境界地で検出した平面不定形状を呈する土坑。確認規模は南北長５mを測る。底面は凹凸があり、複数の遺構が切りあっている可能性がある。埋土は上層が橙色ローム土に暗褐色土や黒褐色土の混入、下層が黒褐色土で橙色ローム土を混入する。

出土遺物 中世頃を中心とする土器細片や須恵器・白磁碗細片、近世陶器細片が少量出土している。

中世から近世の時期の遺構か。

ピット（SP）

ピットは削平によるのか、数は少ない。遺物が出土したもので16基を数える。ピットの埋土は暗褐色粘質土、黒褐色粘質土、黒色粘質土、橙色ローム、褐色土などに分類出来、遺構の時期を示すものであろう。

SP01（Fig.17、PL.7）

調査区北側寄りで検出した円形を呈す大型のピット。規模は0.58×0.60m、深さは0.26mを測る。底面から古墳時代土師器片が出土している。埋土は橙色ロームブロックに黒褐色粘質土を混入する。

出土遺物（Fig.18） 87・88は土師器。87は小型甕胴部1/2片。外面粗いハケメ、内面は摩滅するが、丁寧なナデ。器壁は厚手である。胎土は4㎜内の粗砂粒を多く含む。焼成は良好。色調はにぶい橙色を呈す。88は鉢口縁部片。復元口径は10.2cm、復元器高5.0cmを測る。手捏ねで指押え痕が残る。胎土は3㎜内の砂粒を多く含む。焼成は良好。色調はにぶい黄色を呈す。

SP11出土遺物（Fig.18）

89は弥生時代中期の高坏脚基部。M字形突帯が1条巡る。調整は磨滅するがナデか。胎土は精良。焼成は普通で、色調は丹塗りで橙色を呈す。

3．小　結

以上調査概要について述べたが、ここではそれらを整理して若干のまとめを行いたい。まず本調査区で検出した遺構は大きく二時期に分けることが出来る。

第Ⅰ期は井戸の時期で弥生時代中期後半から弥生時代終末期・古墳時代初頭にかけて、那珂八幡古墳造営直前の時期である。本調査区周辺の調査区では該期の井戸は第13次調査区で4基、第34次調査区で8基検出されており、本調査区分と合わせ16基となる。西側に隣接する第62次調査区では井戸は検出されておらず、井戸の検出は本調査区から東側に限られる。この時期の生活遺構は井戸が集中する第34次調査区では古墳の周溝の掘削による破壊もあるかもしれないが、住居跡は検出されていない。東側の第13次調査区では該期の竪穴住居跡が多数検出されており、これら井戸の住居地域の中心であった可能性が高い。また井戸が集中するのは人力で掘削して取水が可能な地下水脈が当時このあたりにあったのかもしれない。

第Ⅱ期は中世で溝SD12の時期である。時期を決めうる遺物の出土はないが、周辺調査区との遺構の繋がりから、このあたり一帯で確認されている16世紀代の屋敷地区画溝の一部であると考える。これについては、今後機会を見て、改めて考察を行いたい。

周辺調査区参考文献

第13次調査区……福岡市教育委員会『那珂 2』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第222集　1990
第32・34次調査区……福岡教育委員会『那珂10』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第365集　1994
第62・64次調査区……福岡市教育委員会『那珂22』 福岡市埋蔵文化財課第597集　1999

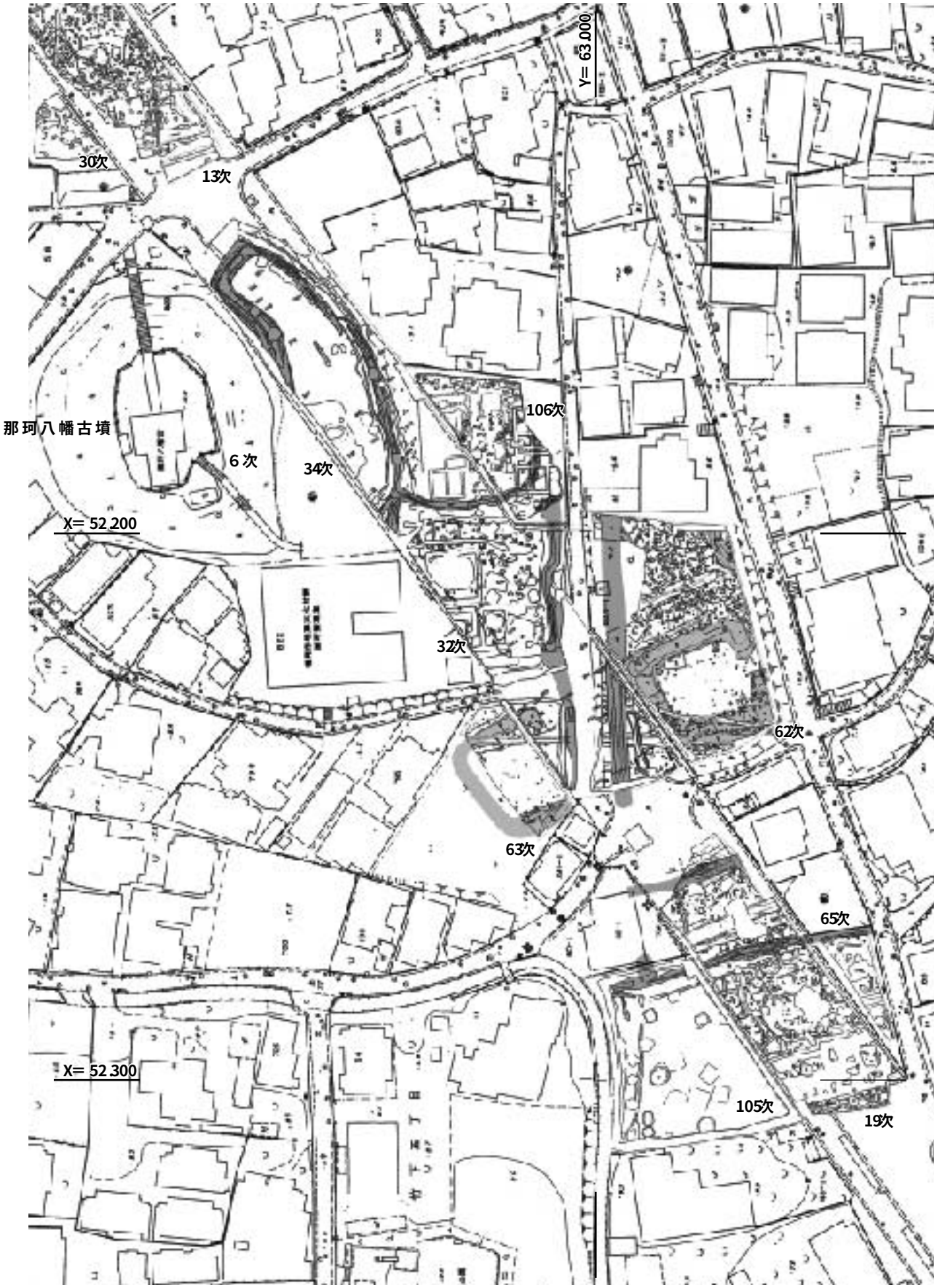
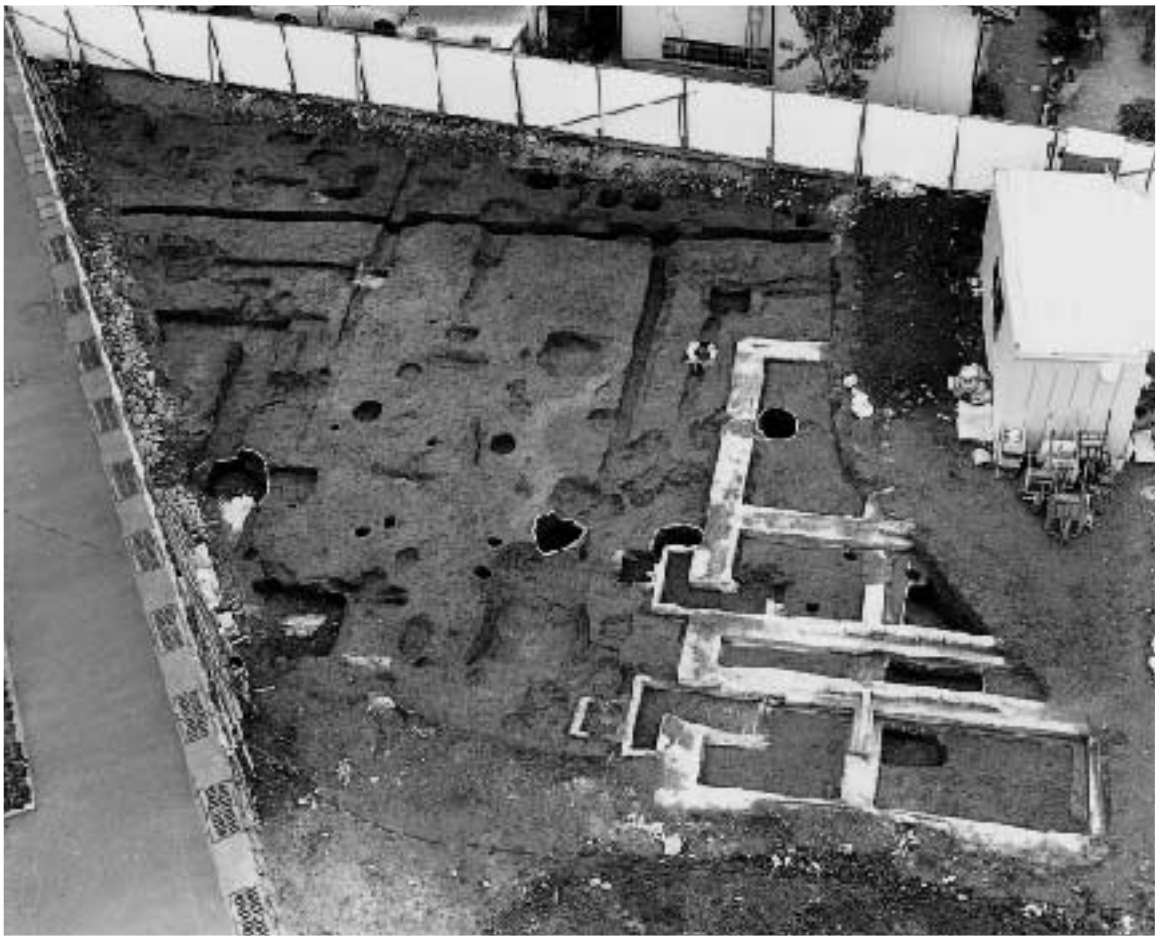


Fig.19 第106次調査区周辺遺構状況図（1/1,000）

（濃いアミは中世後期溝
薄いアミは方形周溝墓）

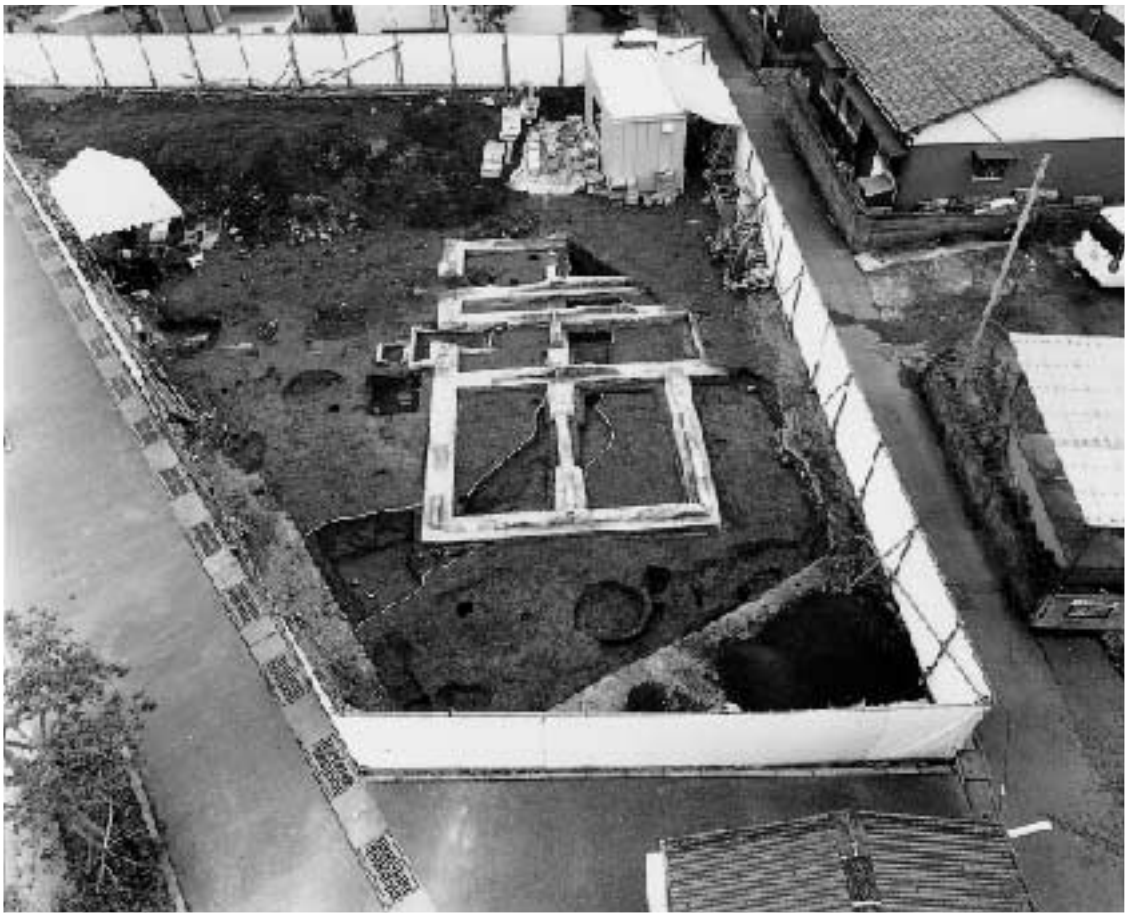
図　　版
（ＰＬ）

⑴調査区から那珂八幡古墳を臨む（南西から）

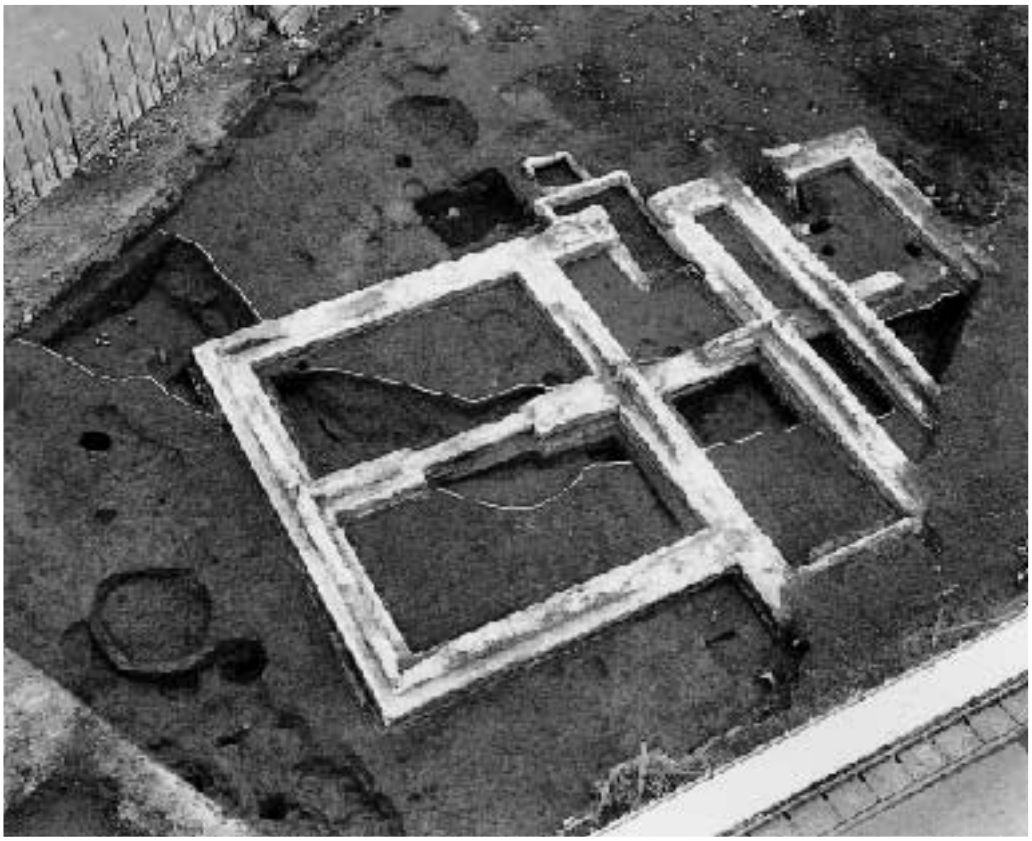


⑵１区全景（南西から）

PL２



⑴２区全景（西から）



⑵ SD 12（南西から）

⑴ SE02(西から)

⑵ SE02断ち割り(南から)

PL.4

⑴ SE02遺物出土状況（西から）

⑵同 下層遺物出土状況

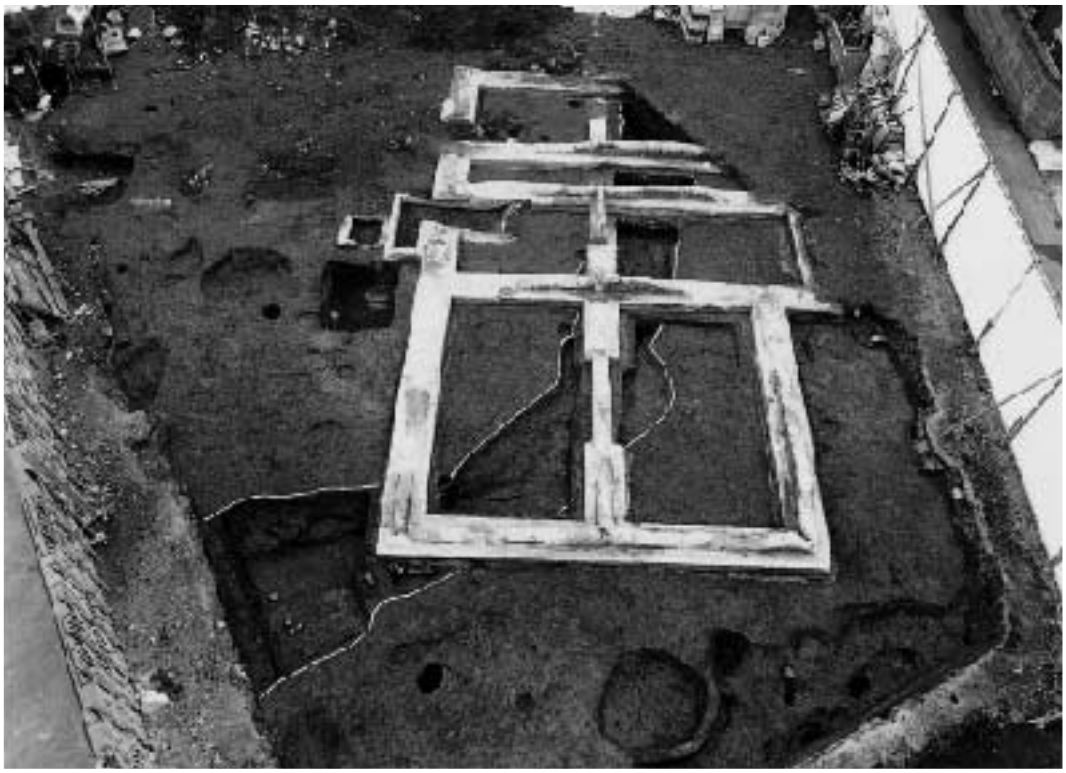
⑶ SE04（南東から）

⑴ SE06（北から）

⑵同 遺物出土状況（南から）

⑶ SE17（北から）

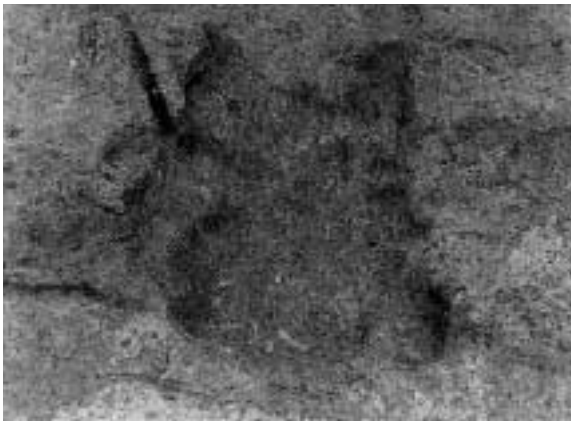
⑷同 遺物出土状況



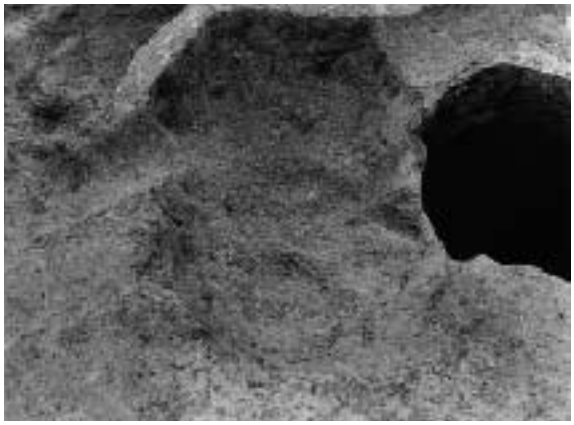
(1) SD 12(西から)

(2) SD 12北壁土層(南から)

(3) SK 19・ SX 21(北西から)



(1) SK 01(南から)



(2) SK 03(北から)

(3) SK 05(北東から)

(4) SK 09・10・14(北東から)

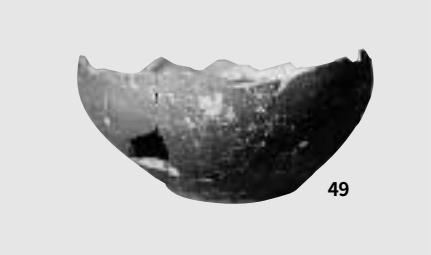
(5) SK 18(北から)

(6) SK 19(北から)

(7) SK 20(南から)

(8) SP01(南から)

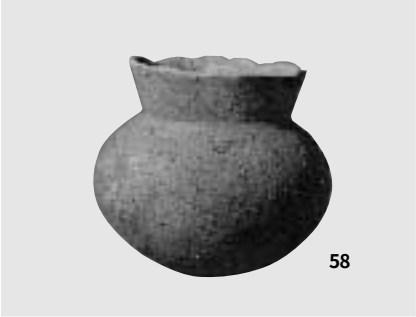
SE02出土土器①　　（縮尺不統一）

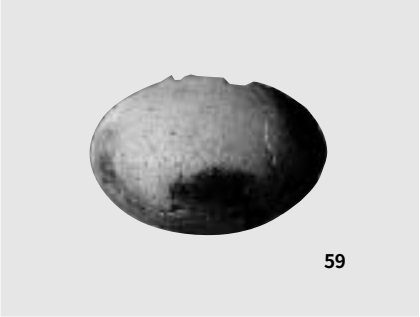


⑴ SE02出土土器②

⑵ SE06出土土器①

（縮尺不統一）





⑴ SE06出土土器②

⑵ SE17出土土器　　（縮尺不統一）

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかよんじゅうさん
書名	那珂43
副書名	那珂遺跡群第106次調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	891
編著者名	山崎龍雄 /久住猛雄
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810－8621福岡市中央区天神１丁目８－１　TEL092－711－4667
発行年月日	西暦2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
なかいせきぐんだいひゃくろくじ 那珂遺跡群第106次	ふくおかしはかたくなかいっちょうめはっぴゃくさんじゅうななばんのいち 福岡市博多区那珂１丁目837番１	40135	0085	333454	1302536	20050111 ～20050216	333	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
那珂遺跡群第106次	集落	弥生時代、古墳時代、中世後期	弥生時代－井戸４/古墳時代－土坑１/中世後半－溝１＋土坑５	弥生時代－弥生土器＋敲石＋柱材＋ヒョウタン /古墳時代－土師器＋須恵器 /中世－土師器＋瓦＋石塔	弥生時代中期から後期終末にかけての集落と、中世後半期の屋敷地

要約

本調査区は那珂遺跡群の中央部、那珂八幡古墳の南側に位置する。調査区は旧国鉄の官舎で、かなり削平を受けており、遺構の残りは不良であったが、弥生時代中期後半から弥生時代終末期井戸４基と、中世後半の溝１条を確認した。井戸については、北側道路部の調査でも同時期の井戸が検出されており、古墳時代初めに那珂八幡古墳が造営されるまでは、一帯が集落であったことが分かる。また中世後期の溝は矩形に曲る溝であり、屋敷地の区画溝である。那珂遺跡群では各調査区で同様の溝が検出されており、中世後半期（戦国時代）には、那珂遺跡群内に溝に区画された屋敷地群が展開していたことが推定出来る。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第889集

那　珂　43

―那珂遺跡群第106次調査報告―

2006（平成18）年３月31日発行

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号

印刷　（株）玉川印刷
福岡市中央区清川３丁目18番11号